縄文丸木舟覚え書—房総の諸事例から

高　橋　統　一

まえがき：本稿執筆の契機
Ⅰ　千葉市　落合遺跡（検見川低湿地泥炭層）
　1．丸木舟発掘の経緯
　2．丸木舟の年代比定および「大賀ハス」との接点
Ⅱ　安房郡丸山町　加茂遺跡（丸山川低地泥炭層）
　1．丸木舟発掘の経緯と研究成果
　2．丸木舟の形態と年代—松本信広から清水潤三へ
Ⅲ　九十九里平野（八日市場市とその周辺）の低地・低湿地遺跡
　1．九十九里平野での丸木舟発掘の進展
　2．遺跡・遺物と丸木舟の年代比定
　　—台地・低地・低湿地とムラ・キャンプ地・丸木舟
Ⅳ　館山市　海蝕洞穴の丸木舟
　1．大寺山洞穴遺跡—舟葬と他界観
　2．鉈切洞穴遺跡—鉈切神社の縁起説話と社宝
注
参照文献
あとがき：むすびに代えて

まえがき：本稿執筆の契機

去年（2003，平成15）の初夏に福井県への小旅行で，三方湖畔の鳥浜貝塚・縄文博物館に展示してあった丸木舟をみたことが本稿執筆につながりましたので，それについて少し触れておきます。

かつて昭和40年代後半（1971～74）に宮座の調査で滋賀県の各地を訪ねた折に，湖北の塩津までくると，そこから北陸線の深坂トンネルを抜けると福井県になるので，近江から若狭や越前への古代の道筋もこの辺りだったのかな，などと思ったのですが，数年前に記紀を読んでいて神功皇后や継体天皇にまつわる伝承に北近江と若狭・越前との関わりを窺わせるものがあることを知り，福井県を探訪してみようと考えたわけなのです。

初日は東京を新幹線で発ち米原で北陸線の特急に乗換えてから，敦賀と福井を経て芦原（アハラ）温泉駅で降りタクシーで椚（クヌギ）古墳へゆきました。これは横穴式の石室がある小円墳で古墳時代後期，6世紀頃の首長級のものとされていますが，玄室には棺も副葬品もなく不明とのことでした。近くに同様な古墳が二つほどあるというので探しましたが見当らず，駅に引返して福井にゆきました。

福井では継体天皇を祀る足羽（アスワ）山の足羽神社に参詣したところ，郷土博物館があったので見学しようとすると，移転準備のため休館中でした。ただ館の外に大きな舟形石棺が安置してあ

り，その解説によると，1958年（昭和33）の足羽山公園建設工事の際に，宝石山古墳（仮称）から出土したもので，棺内には二体の男女が埋葬され，また棺の内外に鉄刀・斧・鉾・櫛・鹿角製刀装具などの副葬品があったそうです。副葬品は館内に展示してある，としてありましたが，勿論これらは見ることができませんでした。その夜は福井に宿泊し，翌朝の特急で敦賀にゆきました。

まず仲哀天皇を祀る気比（ケヒ）神宮と，気比の松原の海を隔てこれと相対して，神功皇后を祀るとされる常宮（ジョウグウ）神社を参詣しました。大林太良さんの『私の一宮巡詣記』―上梓の前に亡くなられたので遺著となりました―には気比神宮がとりあげられ，『奥の細道』が引かれて芭蕉が元禄2年（1689）に参ったことが記されています。

芭蕉はその翌日，西行の古歌への由縁（ユカリ）で，気比から海上七里の種（イロ）の浜（色浜）に舟行しております。色浜の集落では，昭和30年代まで使用されたという産屋をみることができました。

なお，大林さんが自著の書名になぞらえた『一宮巡詣記』の著者，神道家の橘三喜は元禄9年（1696）に気比神宮に詣でていますが，そこには「海中の島に神功皇后を斎（イワ）う常宮の社あり」と書かれていますから，当時の常宮は島であったようです。〔大林　2001，238～9〕

それから敦賀に戻って午后はタクシーで少し遠出し，三方湖へゆきました。鳥浜の縄文博物館の見学は時間を要するので明日にまわし，運転手が奨める舟小屋を見に湖の北のはずれ，北庄という集落までゆくと，萱ぶきの舟小屋が湖岸に並び，小さな漁船がいくつも舫（モヤ）っていました。丹後半島の伊根の舟屋はテレビで知っていましたが，これは全く予期しなかっただけに，嬉しいひとときでした。この日は若狭湾に面した美浜に宿をとりました。

3日目は美浜駅から二つ先の三方へ電車でゆき，そこから鳥浜まで歩き博物館を昼まで見学しました。帰りは同じ道を三方駅へ戻り敦賀へ出て，京都経由で帰京したのですが，鳥浜で驚いたのは，ここの博物館の規模の大きいことと，その展示の仕方でした。

これは円いドーム形の大きな建物ですが，エレベーターで昇ってから，順路沿いに次第に降りながら展示を見るという方式です。そしてこれは，あの帝国ホテルを建てたライト氏が最晩年に設計した，ニューヨークのアブストラクツ・アーツ作品だけを展示してあるグッゲンハイム美術館とよく似ています。こうした類似は偶々そうなのか，鳥浜の方でそれを採り入れたのか判りませんが，鳥浜の場合はちょうど地表から地層を掘り下げてゆくと，やがて三隻の丸木舟が次々に現われる…といった展示になっていて，丸木舟がこの博物館のポイントのひとつであるだけに興味を唆られました。

ところで，三方湖に次ぐ鯖（ハス）川の南約1kmの上流の，西から流れてくる高瀬川との合流地点で1962年（昭和37）に護岸工事が行われ，そのときに鳥浜貝塚が見つかり，すぐ立教大学と同志社大学により発掘調査が始まりました。

以来，1985年（昭和60）の第10次まで発掘が続けられるのですが，縄文前期のほぼ完形の丸木舟第1号（スギ材）が出土したのは第6次の1980年（昭和56）です。ここに至るまでの経過については，博物館の売店で入手した森川昌和『鳥浜貝塚』（2002）に紹介されておりますが，丸木舟フィーバーに明け暮れていただけに，資料館（博物館）のメインとなる目玉の展示品が出土し県当局も喜んだ，と同書は記しています。そして，同書のさらに先の頁には次の文言があったのです。

「これまでに縄文前期の丸木舟の出土は，1948年（昭和23）に慶応大学によって調査された千葉県加茂遺跡のムクノキ製の舟が，もっとも早い出土例としてよく知られていた[1]。」〔森川　2002，70〕

このことは考古学に疎い私にとって全くの初耳でした。

そこで千葉県の地図で館山市に近い太平洋に面した丸山町加茂に見当をつけ，問合わせたところ，そこだとわかりました。ただ丸木舟は慶応大学の方に収蔵されているとのことなので，慶大の近森正さんに御教示をお願いすると，なんと貴重な発掘調査報告書『加茂遺跡』(1952)を恵贈下さったのです。

御好意に感謝し早速それを繙くと，同書の主論文ともいうべき第５章「上代獨木舟の考察」(執筆は松本信広教授)に，加茂と並んでその当時，千葉市畑町でも丸木舟がみつかり，慶大考古学教室・日本考古学研究所・東洋大学考古学会の共同調査が行われて，発掘した舟は慶大・武蔵野文化博物館・東洋大に１隻ずつ分けて収蔵されている…舟は３隻で，いずれもカヤ材だが，東洋大のは完形ではなくて破片である…ということが書かれていたのです。〔松本　1952，86〕

私は1957年（昭和32）から東洋大で教職にありましたが，こうしたことはついぞ見聞したことがなく，全く驚くばかりでした。考古学は専門外で，これまでの不勉強はさておき，これから先は皆さんのお力を借りながら，自分で調べるしかない，と考えたわけなのです。

Ⅰ　千葉市・落合遺跡（検見川低湿地泥炭層）

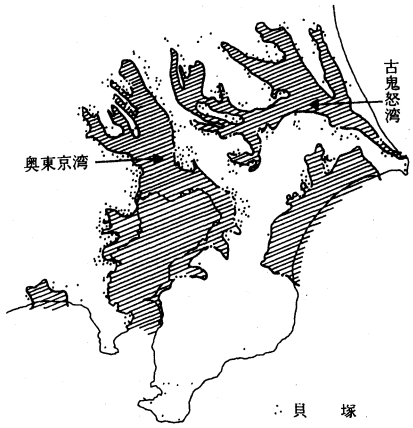
１　丸木舟発掘の経緯

「まえがき」で触れた千葉市花見川区畑町の丸木舟の出土地は，ＪＲ新検見川駅から北へ約１kmの東京大学の運動場になっている処です。

地球の温暖化による約6,000年前の「縄文海進」でこの辺りに古検見川湾が形成され，その後，近くの花見川の運搬堆積作用により砂州が発達して河口がふさがれると，湾内が後背湿地となって泥炭層ができ，さらにその上に砂州や台地上からの風成層が堆積した，と地理学の中野尊正氏は推定しています。〔中野　1948，図１参照〕

この低湿地泥炭層から出る草炭を，代用燃料

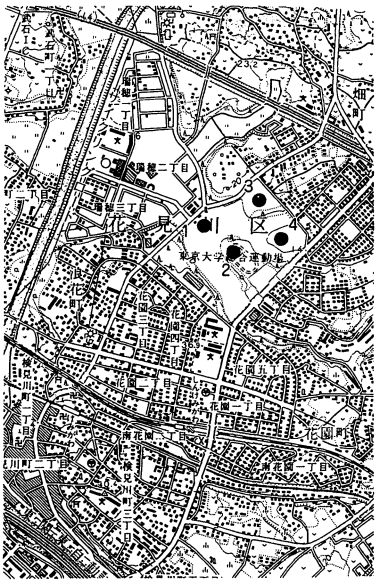
図１　縄文時代の海岸線〔江坂　1954より〕



として戦時中から戦後にかけて採掘・利用したのが，丸木舟の発見につながったというわけなのです。したがって，ここは「検見川泥炭層遺跡[2]」とも呼ばれていますが，「検見川遺跡」とか「畑町遺跡」などとも呼ばれて紛らわしく，地名をとって「落合遺跡」とするのが正式名称とのことです。なお，東大グランド内には，この他にも３つの遺跡があります。これらの遺跡は落合を含め，確たる調査歴（正式な発掘調査報告）が乏しいままに，グランド造成で消滅してしまっているのですが，「検見川遺跡群」と総称されています。〔以上は，四柳2000による〕それにくらべ，発芽し開花した古代のハスの種子で，すっかり有名になった「大賀ハス」も，この泥炭層から出土しており，何とも皮肉なめぐりあわせ，としか云いようがありません。〔図２，写真１参照〕

写真１は現在の落合遺跡ですが，当時とはだいぶ変ってしまっているようです。前方左に小さな１本の植木がみえますが，その根方に「国土地理院測定　大賀ハス発掘地」と刻字した石碑があります。最初に丸木舟が見つかり，続いてもう１隻と別の破片が発掘された，本来の落合遺跡は，この写真を撮ったカメラのあたりかと思いますが，そこには落合遺跡とか丸木舟云々の標識は何ひとつありません。

図2　落合遺跡と検見川遺跡群〔四柳　2000より〕



1 落合遺跡　2 中谷遺跡
3 中鶴牧遺跡　4 鶴牧遺跡

写真1　落合遺跡の現状

なお，大賀ハスには丸木舟の年代比定と微妙に関わる事柄があり，またここから北東へ約2kmはなれた犢橋（コテハシ）貝塚にも，同様な問題がありますので，それらについては次節で触れることにします。

それでは丸木舟発掘の経緯を，わずかの文献資料や聴取りからですが，記してみます。

「まえがき」で引用した松本信広論文によると，1947年（昭和22）7月28日に東大運動場予定地の，上述の草炭採掘場で丸木舟がみつかったとあります。〔松本　1952，85～6〕。それが，その秋に千葉県の地方紙『第一新聞』に「丸木舟のミイラ」という大見出しで報道されたので，当時，日本考古学研究所で研究員をしていた吉田格（イタル）氏が，早速実態を確かめに行ったそうです〔吉田　1991，3〕。これは戦後の新聞用紙がとても不足していたときの地方紙ですから，週刊もしくは旬刊かもしれませんが，現物もみていないので，刊行月日はわかりません。

この日本考古学研究所というのは，戦前に来日し，武蔵野市吉祥寺の神言会に所属していた神父で考古学者でもあった，ジェラード・グロート（Gerard J. Greet）師が戦時中の収容所での抑留が解かれて，1946年（昭和21）に千葉県市川市国府台に創設したものです。長谷部言人・原田淑人・渋沢敬三・後藤守一・大場磐雄・直良信夫・八幡一郎・松本信広・甲野勇・駒井和愛・江上波夫・杉原荘介などを顧問に，甲野勇・吉田格・江坂輝弥・芦沢長介などを研究員に，というように大家と少壮有為の人々を集めて発足しました。戦後，中国から復員した吉田氏は甲野氏のすすめで，ともにここに就職していたのですが，このお二人が落合での発掘に参加することになったわけです。〔吉田　1991，1～3〕

一方，慶大の松本信広教授は，かねてから丸木舟に多大の関心をよせておりましたから，先の新聞報道によらずとも，いち早くこの情報をキャッチしておられたのかもしれません。そしてこの関心・熱意が，次章でとりあげる1948年（昭和23）の千葉県安房郡加茂での丸木舟発掘につながっていったのではないでしょうか。

というのは，松本論文の場合，落合遺跡の丸木舟の年代比定をするのに，その決め手となる縄文土器が伴出しないので，窮余の方策として加茂や八日市場との関連づけで試みる，という視座になっているからです。（次節を参照）なお，落合での慶大の発掘担当者は，松本教授よりも，弟子の清水潤三氏と前述の日本考古学研究所の研究員を兼ねていた若手の江坂輝弥さんであったようです。

ところで東洋大の方はどうかというと，またまた吃驚したのは，なんとこちらは教員・研究者ではなく，数名の学生たちだけで，しかもまだ予科生だったのです。判明した氏名と専攻は，大和久震平（史学）・市原寿文（史学）・安藤恒敬（史学）・宮本義孝（社会学）・桜本立夫（国文学）で，リーダー格の大和久君が当時，検見川に近い津田沼に下宿しており，おそらく新聞記事よりも先に，丸木舟のことを聞き駆けつけたようです。後に大和久氏は，『東洋大学文学部史学科の五十年』〔大野　1988〕という冊子に「思い出」という文章を寄せていますが，そこでは丸木舟のことになぜか触れておりません。ただ，そこに「私達が学内で初めて考古学会を組織した時，相談に乗って下さったのが守屋先生で云々…」とありますので，これが先の松本論文にある東洋大学考古学会でしょう。〔大和久1988〕この文章の末尾に（昭和27年卒，帝京短期大学講師）とあるように，大和久氏は考古学者として大いに活躍されていたのですが，現在は消息不明のため丸木舟の話を聴くことができません。また，この「思い出」には「当時の東洋大学の東洋史は東大の出店のようなものであった」とあり，卒論主査の原田淑人先生をはじめ，東大系の諸先生のお名前を挙げ，東洋大と関係のなかった江上波夫・関野雄先生からも教えを受けたと書かれています。（なお，前述の『東洋大学文学部史学科の五十年』の教員一覧には，昭和21年４月～23年３月の非常勤講師に松本信広の名がのっております。）

守屋先生とは，大和久氏らが学部在学中に大阪大に移り，のちに文学部長をなさった時に亡くなられた守屋美都雄先生のことで，「東大東洋史の線密重厚な学風の反面，兄貴のような存在で学生の面倒をよくみられた」と大和久氏が述べておりますから，“東洋大学考古学会”なるものは，この守屋先生が学生たちの後楯になる形をとっていたように思われます。大和久氏はさらに「…守屋先生は，原田先生や先輩の三上次男先生と相談され，考古学の教授として東大理学部の人類学教室から，和島誠一先生を東洋大学に迎えた」と書いています。そして，前述の学生５人のうちの市原氏によると，守屋先生は落合遺跡には直接来られなかったが，和島先生はたしか丸木舟の発掘調査が終った頃に見えられた，とのことです―和島先生も，その後東洋大から岡山大に移られました。なお，市原寿文氏もずっと考古学を専攻し現在は静岡大学名誉教授です。また宮本義孝氏はその後，都市社会学を専攻し，同様に現在は立正大学名誉教授です。

さて，落合遺跡の発掘は松本論文によると，次のように始まりました。前述の草炭採掘作業中での丸木舟発見後に（おそらく1947年12月の試掘により）附近の表土以下約３ｍ20の地点で，もう一つの丸木舟の一部が見つかったので，越えて1948年（昭和23）１月25日に前述の三者による共同調査が発足したのです。但し，調査団の組織化や調査費の裏づけが明確でなく，いわば手弁当だったらしいことの他に，おそらく前述した決め手となる伴出遺物がみつからないこともあったりして，間もなく幕を閉じることになってしまいます。

そしてこうした状況は，２隻の丸木舟と半分ほどの舟の破片の落ちつく先に反映しているように思われます。最初に採炭作業中に発見された舟（長さ６ｍ20，幅43cm）を武蔵野文化博物館へ，次に発掘出土した舟（長さ５ｍ80，幅48cm，深さ44cm…舟の先端に小突起があって，従来の刳舟にみられぬ特色あり）を慶大へ，前二者より少し大型の丸木舟の破片（長さ３ｍ48，幅52cm）を東洋大へ，それぞれ収蔵させることで決着がつけられたわけです（なお，発掘調査修了の月日は不明）。〔松本　1952，86．写真２・３・４〕

それから，ここに出てくる武蔵野文化博物館ですが，吉田格氏によると，前述の日本考古学研究所に，この時点でトラブルがあって結局，丸木舟はこの博物館の方へゆくことになったの

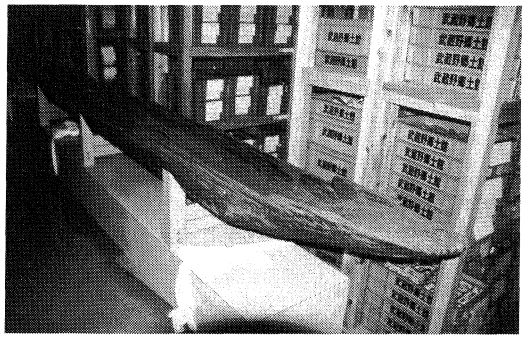


写真2　落合遺跡で最初に見つかった丸木舟
〔小金井市江戸東京博物館分館蔵，注3参照〕

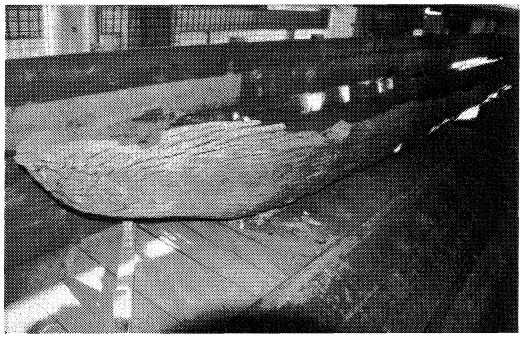


写真3　落合遺跡で二番めに発掘された丸木舟
〔慶応大蔵〕

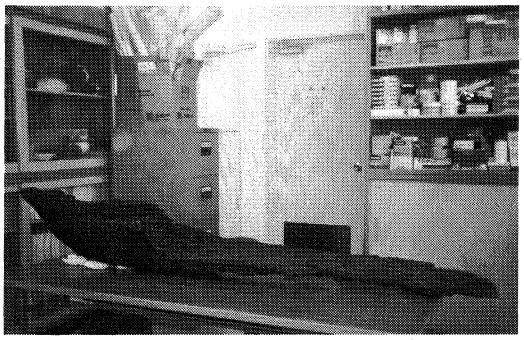
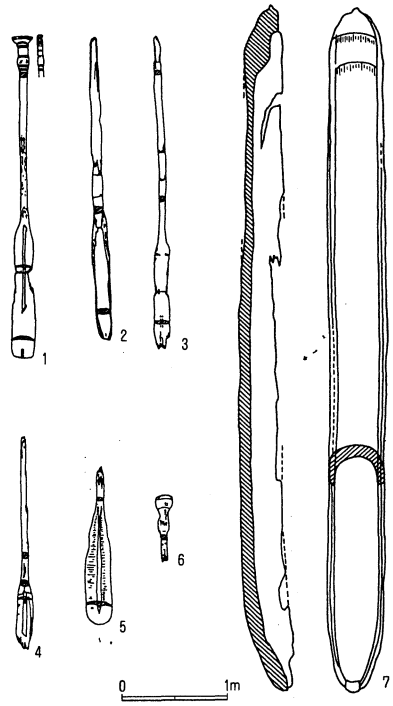


写真4　落合遺跡で三番めに発掘された丸木舟
〔東洋大蔵〕

図3　落合遺跡出土の丸木舟および櫂（1／50）
〔四柳　2000より〕



です。

そのトラブルというのは，研究所長のグロート師と甲野勇氏の間に，丸木舟の引とり資金の話で意見が対立したことのようです。それで甲野氏は，東京の井の頭公園の自然文化園に新設される武蔵野文化博物館に舟と共に移ることになり，吉田氏もそれに同調したのです[3]。〔吉田 1991，4〕丸木舟の引とり資金というのは，前述のように，共同調査が三者それぞれの自己負担で行われたことの他に，調査地の地元の住民側にもかなりの奉仕的協力や負担をかけたことが，先の松本論文に窺われますから，こうした地元への応分の御礼というかたちで，その報酬のための資金調達が必要だったのではなかろうか，と推察されます。

また，吉田氏は「…丸木舟の他に，完形の櫂が出土し，その柄には三叉文の彫刻が施され，縄文晩期初頭であると考えられた[4]。〔図3参照〕そして，これは研究のため一時，研究所で借用した。」と記しております。〔吉田　1991，3～4〕

最後に，東洋大へ引きとられた丸木舟の破片

の，その後の事情について付言しておきます。前述のように，この舟のことは全く初耳だったので，すぐアジア文化研究所の東洋大史学科出身の飯塚勝重・谷口房男・竹内老子の諸氏にお訊ねすると，そういえば学生時代にそれらしいものを見たことがあるが，いまどうなっているのか知らないというので，みんなで調べると，史学科の博物館学講義・演習室の標本ケースの上に，ビニール包みの大きな破片がみつかりました〔写真４〕。数十年いや半世紀も由来不明のまま，この状態だったようで，昭和32年卒の石井英雄氏や中村毅氏によると，考古学会（研究会）の方は一時期は活発に活動し発掘も行われたのに〔石井（英）1988〕，丸木舟の方は紛失寸前の騒ぎがあったりで〔中村　1988〕永い間，忘れ去られた状態だったのです。

2　丸木舟の年代比定および「大賀ハス」との接点

前述の松本信広論文では，落合遺跡出土の丸木舟の年代について，要約すると，まず次のように述べています。

舟の出土に伴出した考古学的遺物が全くなく，ただ３ｍも堆積した泥炭層の上層から土製の錘（オモリ）が出ているが，これは年代判定の標準にならない。出土地付近の泥炭層の上部から土師器の壷が出たり〔これは現在，江戸東京博物館分館にある〕，また近くに土師器時代の小貝塚があったりして，弥生式土器の破片を拾うことができても，縄文土器の破片はどこにも発見できず，２km 離れた犢橋貝塚までゆかないと縄文の遺物に出会えない。

こうした状況の下で，丸木舟と櫂の刳り方を観察すると，そこに稚掘な凹凸があり，所々に焼痕のある削り方について，石器によるものだとする意見と，いや金属製の道具によるものではないか[5]との対立する見解がみられた。

他方，（前節の冒頭で引用した）中野尊正氏によると，丸木舟が出土した，この遺跡の泥炭層ができたのは，今日の幕張付近の砂地が陸地となる以前であり，しかもこの泥炭層の下底に近い所から出土しているから，泥炭層形成の中期までに年代を比定できるのではなかろうか―但し検見川の谷が犢橋近くまで進入しているので，これらを含めた，地質・地形上の時代的な前後関係を，もっと詳しく吟味する必要がある，とのことである。〔松本　1952，86～７〕

とすれば，落合の丸木舟と関連づけて検討できるような，考古学的遺物を伴出する丸木舟遺跡の発見を待つしかないのではないか。そして，それが可能となったのが，1948年（昭和23）の加茂と1949年（昭和24）の八日市場であったわけです。

加茂および八日市場のことは，Ⅰ章とⅡ章でとりあげるので，ここでの要点だけを記すと次の如くです。

まず1948年12月15日，加茂の発掘区分がＢ区（清水潤三氏担当）の第２泥炭層下部に，１隻の丸木舟が舟底を上にして横たわっているのが見つかりました。保存状態が不良で腐朽が進んでおり，ひきあげる際，多数の破片になってしまいましたが，清水氏の半年にも及ぶ精励刻苦によって見事に復元されました。用材はムクの木で，舟の形は竹を割ったような「割竹型」です―舟の形について詳しくは，次のⅡ章で触れます。そして舟の周囲から多数の土器片がみつかり，これらはＣ区（江坂輝弥氏担当）から出土した「縄文前期の諸磯式土器」と同種のものでしたので，舟の年代に疑問の余地がないと確認されたのです。〔清水　1952，15～16〕

次に八日市場では，1949年７～８月に，３隻の丸木舟が相次いで発見されました（どれもカヤ材）。

そして保存状態のよい２番めの舟は，形がカツオ節のような「鰹節型」で，…これは松本教授によって「割竹型」から発達したとされる（Ⅱ章で後述）…しかも，刳り残しの横梁が４ヶ所ある点が注目されたのです。また，前年の８月には櫂が見つかっていて，その柄に切込みが

あり，これが１節で触れた落合遺跡出土の櫂の彫刻文に類似していることも注目されました。

さらに，この櫂が出た地点に近い所の同じ層位から「縄文末期（晩期）の安行式土器」の大きな破片が見つかったのです。

これらのことから，八日市場の丸木舟と櫂は，落合のそれらと直ちに同一時代とすることはできないが，横梁を造る構造上の複雑さと全体のつくりが華奢な点などから，落合のよりもいくらか後のものと言えるだろう，とされたのです。〔松本　1952，90～92〕

そこで以上を総合すると，落合遺跡の丸木舟は，縄文前期の加茂のものより後で，縄文末（晩）期の八日市場より前の，「縄文後期」のものであろう，ということになったわけです。

さて，落合遺跡の発掘調査が行われた２年後，1950年（昭和25）の春に，東大農学部の大賀一郎博士が，前述の武蔵野郷土館で丸木舟に並べて展示してある，ハスの実の果托をみて，かねて願望していた古代のハスの実を，落合で発見できるのではなかろうか，と考えたのです。果托というのは，ハスの花が咲いて散ったあとに残る蜂巣状の軸のことです。これが出たのなら，ハスの実もというわけで，計画を練り調査費も何とか工面し，地元の協力を得て，1951年（昭和26）３月３日に発掘を始めたのです。前述の舟が出土し，埋め戻した処は地盤がゆるいため，そこから北50mの地点を掘ったのですが，１ヶ月経ってもハスの実を発見できず，諦めかけていた矢先の３月30日に，泥炭（草炭）層の下部から千葉市立七中（花園中）の女生徒が１粒の黒い小さなハスの実を見つけたのです。ハスの実は４月６日にも２粒みつかり，計３粒になりました。そして後の２つは発芽したのですが間もなく枯れてしまい，最初の１粒が発芽後順調に生育し後に，それが開花して全国紙に大きく報ぜられ有名になったわけです。〔高野　1965〕

この「大賀ハス」の実の年代は，差し当り，落合遺跡の丸木舟の年代比定に頼るしかありません。これは次のⅡ章１節での加茂遺跡の丸木舟と関連づける，松本論文の年代比定を参照するということになるわけです。それと，おそらく前節で触れた吉田格氏の，落合出土の櫂が縄文晩期初頭（3,000～2,500年前）とみられていたことなどから，このハスも同様にその頃，2,500年前あたりとされたのです。

その後，この問題は再び丸木舟との微妙な関わりをもつ，思わぬ展開をみせることになるのです。というのは，C14年代測定をするためのハスの実はもうないので，大賀博士は先の丸木舟の破片をそのために使用させてもらうことを思い立ち，東洋大を訪ね，武蔵野郷土館にもまた足を運んだのです。それがいつのことか定かではありませんが，東洋大では，前述の５人の学生のうちの市原寿文氏によると，そのための木片を切りとってお渡ししたことを記憶しているそうで，また吉田格氏も同様に差上げたということです。

これは，カリフォルニア大・バークレー校のP．W．チャーネル教授の1953年（昭和28）５月20日付の大賀博士あての手紙に，舟の木片２個で測定したとありますから，おそらく間違いないでしょう。

そしてシカゴ大学のW．F．リビー教授による，その測定結果は平均すると1125±180B．C．即ち3075年前，前後180年でした。〔千葉市立郷土博物館　1988，17〕

なお，この問題について，渡辺直経氏が感想を述べておられますので，それを紹介しておきます。注５で触れた意見につづいて，次のようになっています。

「…慶大の松本教授によれば〔松本　1952〕，発見当時，現地付近で調査した中野尊正博士は，舟の出土した地層が縄文時代に比定できることを示唆したというし，その後，松本教授自身，八日市場で，別々にではあるが，地表下ほぼ同じ深さの接近した場所から発見した櫂と，

縄文時代末期の安行式土器とを同時代のものと判断して，その櫂と検見川（落合）出土の櫂の頭部の彫刻が似ているところから，検見川（落合）の丸木舟も縄文時代に属する公算が大きいとした。それはいいとしても，その後，検見川（落合）の測定結果を縄文後期にはっきりと比定する向きがあるのは，恐らくこの松本教授の推定を根拠にしていると思われるが，仮にそうするならば，少くとも疑問符くらいはつけておくべきであろう。」〔渡辺　1963，234〕

この感想から，松本説への若干の批判と，そして何よりも当初からあったとみられる「大賀ハス」をめぐる微妙な空気が読みとれるように思います。なお，ここでは丸木舟の形態について，何も触れておりません。

最後に，松本教授の年代比定とだいぶ異る見方を，松本論文の翌年，1953年（昭和28）に提示した武田宗久氏の所説をみておくことにします。その要点は次の如くです。〔武田　1953〕

まず問題なのは，ハスが純淡水の泥沼に生育する植物で，ここのハスは旧（古）検見川湾の海水が湾外におし出され，徐々に浅い潟湖（セキコ）（ラグーン）の状態となり，そこへ花見川の水が滞留して泥沼となったことで，生育できたと考えられる。そして草炭（泥炭）層は淡水化した沼沢に発生した植物の腐朽堆積によるものだから，丸木舟や櫂は，中野尊正氏がいう古検見川湾時代の中末期であると否とに関わらず，湾内の大部分が淡水化された時代ないしその少し後のものである。ただ，ここから2km離れた犢橋貝塚は，本遺跡と同一の谷に面していないことと，そこの貝類が主に鹹水性の貝であることから，両者を直接むすびつけて考えることはできない。

次に，大賀博士が行った，ハスの実の年代に関する蛋白質凝固と温度との関係公式にもとづく発芽試験の結果によると，其処の地下水の温度は地下6mで12℃であったので，この公式にあてはめると1704年経過したことになる〔大賀1951〕。仮にこの年代を許容すると，それは紀元1世紀半ごろとなり，関東地方の弥生時代もしくは古墳時代になる。そうすると，丸木舟も縄文時代ではなく弥生時代か古墳時代ということになり，犢橋よりもここに近い台地の，土師器を出土する数ヶ所の遺跡の住民との結びつきを考えた方がよい。

そして，丸木舟の構造は鰹節型で，内部に帯状の刳残しが数條あって，両舷を補強する工夫の跡がみられ，櫂には利器（金属器か）によって削ったとみられる彫刻があることなどをみると，これらの工程にかなり進歩のあとが窺われる。

そこで付近の遺跡の状況をみてみると，縄文時代の貝塚や遺物包含地が1，2あるけれど，古墳時代の2つの貝塚を構成する貝は鹹水産のものが多く，淡水産はほとんどない。もし，この貝塚を残した住民が丸木舟を使用したと仮定すれば，彼等が貝を採取した場所は古検見川湾内ではなく，外洋，即ちその頃の東京湾沿岸でなくてはならない。丸木舟3隻と櫂6本が発見されたこの入江は，当時の住民にとって，有用な船付場のような所だったであろうし，こうした便利な場所を含む一帯には，かなり大きな集落があったものと推察できる。〔なお，ムラ（集落）・キャンプ地（ここでの船付場）と丸木舟の関わりについては，Ⅲ章2節で西山太郎氏が興味ぶかく示唆に富む試論を述べています。〕

武田氏は早大出身の新進の考古学者で，県立千葉高校で教職にあったのですが，残念ながら，亡くなられたそうです。武田氏の所説には吟味を要する仮定があるにしろ，それなりに首肯を促されるものがあって興味を唆られます。数ページの短いもので，これが当時どのように受けとられ，その後どうなったかについて，私にはわかりませんが，現在も検討に値する視点が窮えるのではなかろうか，と思います。

いずれにしろ落合遺跡は，前節でみたように，発掘の早い段階で終止符が打たれてしまったために，いまなお多くの問題が残されている

わけです。

Ⅱ　安房郡丸山町・加茂遺跡（丸山川低地泥炭層）

1　丸木舟発掘の経緯と研究成果

加茂へゆくには，ＪＲ館山駅からすぐ東へ折れた内房線が，房総半島先端の低い山地を越えて東海岸に出てから，少し北上すると館山から４つめの和田町の南三原駅に着きます。駅前の国道128号を西へゆき，丸山川に架る橋を渡り，しばらくすると丸山町の古川集落になり，ここまで約1.5kmです。そこからさらに0.5kmほどゆき右折すると，地方に延喜式・武内社の莫越（ナコシ）山（ヤマ）神社の森がみえます。神社の手前をさらに西0.5kmゆくと，加茂の神門（ミカド）集落になり，ここが旧豊田村大字加茂字神門で，ここに加茂遺跡があります。（図４，参照）

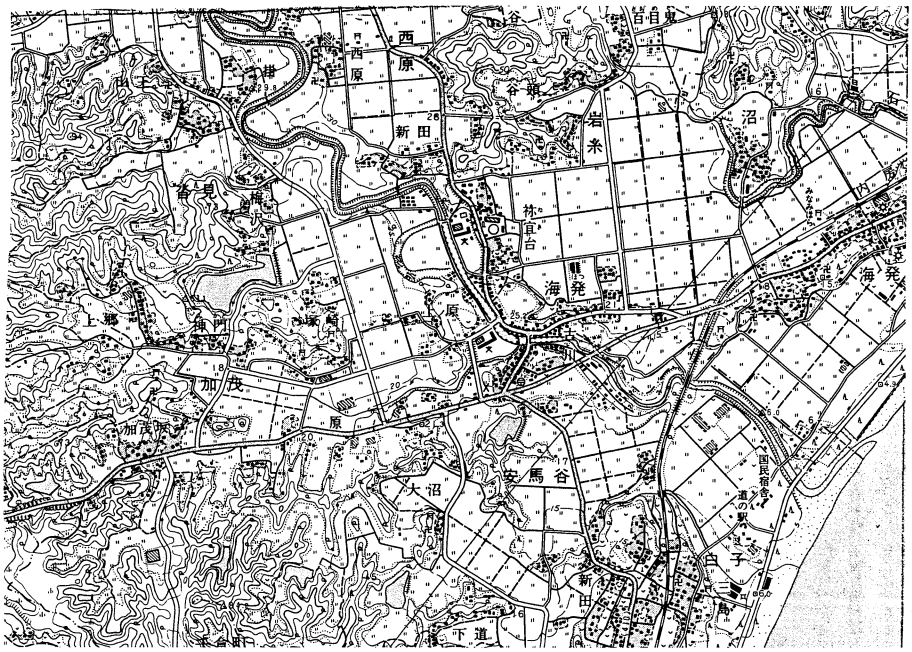
加茂のある丸山町は，南房総でもよく知られた観光地の白浜町や千倉町などと違い，知名度はいまひとつですが，それだけに辺りの風景には，本遺跡発掘当時を偲ばせるものがあるように思われます。

本遺跡は，丸山川の渓谷から分れて西に伸びる細長い低地の，北側の丘陵の裾に位置していますが，当時の状況について，清水潤三氏は次のように述べています。

「…遺跡の前面に拡がる低地は，大部分が今日，水田であるが，標高は16～18mにすぎず，一見して湖沼の干涸したことを想起せしめる。地理学者の研究に従えば，ここの低地は嘗っては海水の浸入を見，一小湾を形成していたが，袋の口にあたる古川（丸山川の支流）の狭い谷が閉塞された結果，湖沼化したのであって，今はその景観を容易に窺い得る地形を残しているのである。我々が発見した泥炭文化層及び獨木舟は，この湖沼化の時期に当るものと認められるから，遺跡はその当時，丘麓に湾入した，小さい入江の末端に当っていたものと推定されるのである。〔清水　1952，２～３。写真５〕」

この神門での発掘の端緒は，1938年（昭和13）８月に遡ります。地元の農家・角田本治氏が自宅の前庭に馬小屋を建てる基礎工事をしていたとき，土器の破片がいくつも出てきたの

図４　加茂遺跡付近の地形（１／25,000）〔国土地理院　安房古川（１／25,000）より〕



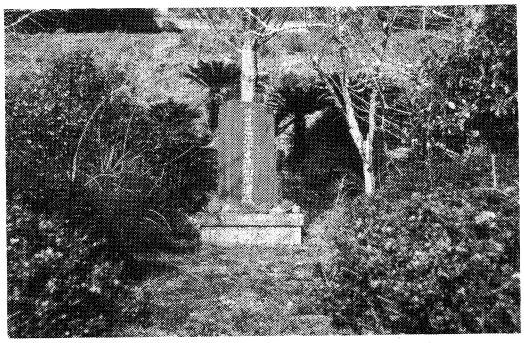


写真５　加茂遺跡

で，御子息の慶一氏にもっと深く掘らせたところ，土器や石器・獣骨などが続々と現われ，さらに地下３ｍほどまで掘りすすむと，多くの流木にまじって丸木舟らしき木製品や数本の櫂が出てきたのです。それで両氏は丸木舟らしきものの１部を切りとり，櫂や土器片などと共に自宅に保存し，その現場の写真を撮影して，一応作業を打切りにしました。そして人を介して，東大地理学教室に遺物の若干を送り，鑑定を依頼したのですが，当時の学界の注意をひくこともなかったそうで，その後これらの遺物は同家の火災でほとんど焼失してしまったのです（写真は現存）。

さて，戦後の1948年（昭和23）の夏に，偶々，夏休を利用して房州を研究旅行中の国学院大の学生・野口義磨君が，以上のことを知り，これを慶大の松本信広教授にお知らせしたのです。ちょうどこの時，古代丸木舟研究のための研究費を文部省から受理した松本教授は，副手の江坂輝弥氏と国内を調査旅行中でしたので，野口君の案内で当地を訪れ，こうして同年12月１日に，慶大考古学教室によって発掘がはじまることになったのです。発掘に携わったのは松本信広・藤田亮策の両教授，清水氏，江坂氏と野口君を含む学生４名の計８名で，豊田中学校の作法室を宿舎にし，中学の先生や生徒10名ほど，他に豊田村の青年団員数名の労力奉仕もあって，作業はスムーズに進行しました。

角田氏がかって発掘した地点をＡ区とし，その南にＢ区，そしてＢ区の東側をＣ区とし，Ⅰ章２節で触れたように，それぞれ清水・江坂氏を担当者として，作業をすすめた結果，半月後Ｂ区で丸木舟と諸磯式土器の破片を，Ｃ区でその諸磯式土器を，それぞれ発見することができたのです。〔清水　1952，５～16〕

本遺跡の正式な発掘調査報告書は1952年（昭和27）３月21日付で，文部省の研究成果刊行費により三田史学会から『加茂遺蹟―千葉県加茂獨木舟出土遺蹟の研究』として公刊されました。目次からその概要を記してみますと，次の通りです。

まず発掘の指揮をとられた考古学界のヴェテラン藤田教授が「緒言」を書き，そして１～３章の「遺蹟の位置及び地形」・「遺蹟の発見」・「発掘の経過と遺蹟の状態」を清水氏，４章「文化遺物」の(1)石器と(2)土器を江坂氏，(3)木製品を清水氏がそれぞれ執筆し，５章「上代の獨木舟の考察」を松本教授が執筆しています。ここまでが全体の⅔に当るほぼ100頁の考古学部門で，以下は自然科学部門として，次の方々が委嘱をうけて，各自が研究した課題の報告を寄せています。即ち「加茂遺蹟の地学的考察」（多田文男・中野尊正），同じく遺蹟発掘の「動物遺存体」（直良信夫），「化石昆虫」（吉田晶），「木質出土品」（亘理俊次・山内文），「植物性遺物」（前川文夫），「泥炭層の花粉分析」（堀正一），「土器に塗られた塗料」（田辺義一）などです。

そして最後に，全体を通観した本研究の成果を９項目にわたって，「続語」として締め括っています。ここではそれらを列挙する必要もなかろうと思いますので，その最も肝要な事柄に絞るとしたら，それはやはり，こうなるでしょう。

当時の研究状況からすれば，本遺跡発掘の丸木舟が他の類例をみない型式に属し，また諸磯式土器を伴出していることから，縄文文化前期のもので，わが国最古の丸木舟であり，これによって丸木舟の編年研究の基礎ができた，ということです。

なお本書には詳しい索引と，巻末に21の図版・写真が収録されており，また14頁に及ぶ英

写真6　加茂遺跡縄文資料館

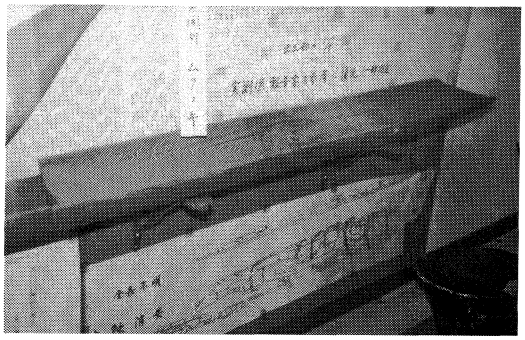


写真7　同資料館展示の丸木舟標本

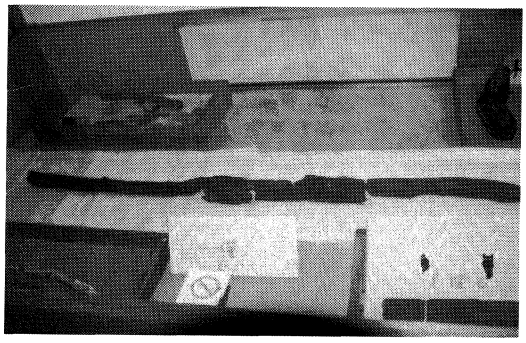


写真8　同じく櫂

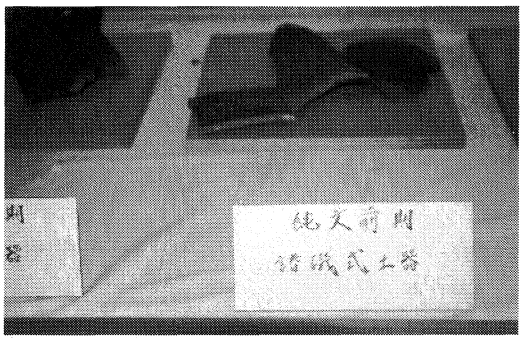


写真9　同じく諸磯式土器

文抄略が載っています。KAMO：A Study of the Neolithic Site and a Neolithic Dug-Out Canoe Discovered in Kamo, Chiba Prefecture, Japan. Mita Shigakukai Tokyo 1952（英訳は児玉省教授）

それから，本遺跡の一隅に「加茂遺跡縄文資料館」があって，発掘した舟と同材のムクの木で作製した丸木舟の標本，そして櫂や諸磯式土器の破片などを展示しており，常勤職員はおりませんが，誰でも自由に見学できます。また，そこには昭和24年１月10日付の慶応義塾・潮田江次塾長から角田慶一氏への毛筆による鄭重な礼状も展示してあります。〔写真６，７，８，９〕

2　丸木舟の形態と年代
―松本信広から清水潤三へ

清水潤三氏は『加茂遺蹟』公刊の16年後に「古代の船―日本の丸木舟を中心に」という論文をまとめていますが，その書き出しに続く〈丸木舟を追って〉の項で，次のように述べております。

「太平洋戦争が終って復員した私は，慶応義塾大学の考古学研究室に戻り，松本信広教授を助けて研究室の再建に従事した。教授は周知のとうり民族学・言語学に通暁され，ユニークな歴史研究によって独自の学風を打ちたてられたのであるが，早くから東南アジアと日本の関係，さらには日本民族の源流を明らかにしようと努められ[6]，その有力な資料として古代の船に注目されていた。即ち，もし日本民族が他から移り住んだとするならば，島国である以上は船を用いたに相違なく，わが国古代の船の形式が周辺地域のそれと合致するならば，彼らの故郷を推定する重要な手がかりとなることに思いをいたされておられたのである。当時，わが国の古代の船に関するまとまった研究には，西村真次氏の労作があったが，大正から昭和初期にかけてのもので，考古学の研究が不十分な時代に書かれたために，なお全幅の信頼をおくものとはいえなかった。」〔清水　1968，33〕

ここで言及している早稲田大学の西村真次教

授の労作とは，英文で書かれた A Study on the Ancient Ships of Japan 15 vols. 1917～36（未完）のことですが，これは日本語では出版されておりません。ただ，丸木舟について日本語で書いたものに1916年（大正５），1934年（昭和９）と1938年（昭和13）の論文があります〔西村（真）1916，1934，1938〕。そして特に1938年の論文に示された，西村教授の「刳舟の二型式を人種の差にあてはめる見解」に対して，松本教授がそれを是正する所論を，前述の『加茂遺蹟』の論文で提示されたわけです。

丸木舟の形に三種の基本形態があって，それは西村教授によると，竹筒を二つ割にしたような“割竹型”と，その前後を尖らせた“鰹節型”，そして鰹節型の前後端を直線的に切る点では割竹型に似ているが，断面が凵型を呈する“箱型”の三種になります。これらは西村教授の命名なのですが，この分類はヨーロッパでの研究成果を借用したもので，それぞれメーリンゲン型・ローベンハウゼン型・サントバーン型といわれるものに相当します。ところで問題なのは，その年代的な前後関係について，鰹節型を日本人以前にいたとするアイヌと結びつけ，これを「旧アイヌ型」とし，そして割竹型を原日本人と結びつけ，こちらを「原日本人型」としたことです。

人種型をつなげるこのような見解には，当初からつよい反対論があったのですが，松本教授は，これまでに全国各地で発見された61例の丸木舟について，それらの用材・大きさ・形態と技法及び伴出の土器などの遺物をチェックしながら[7]考察をすすめ，先述のように，年代的には加茂のような割竹型の方が早いことを確証したわけです[8]。

さて，こうした松本説をふまえ，清水氏は丸木舟の形態と年代について，その後どのような見解をとるようになったのか，についてみてゆくことにします。なお，清水氏はご自分が実際に発掘された24隻も含め，総計91隻を調査したそうです。注７の〔清水　1962〕では辞典なので，清水氏は主要な事柄を重点的に書いているだけですが，以下では，舟の形態と製法及び技術との関連について立入って考察しています。〔清水　1968，37～41〕

まず，前述の割竹型・鰹節型・箱型の他に，前端が鰹節型のように尖っているのに，尾端が割竹型ないし箱型になるものがあって，石井謙治氏は，これを“折衷型”として加え，四分類説を提唱しています〔石井（謙）1957〕。

そして清水氏は，ご自分の体験でも，日本ではこの折衷型が盛んに造られているので，この説に敬意を表したいとしております。〔図６参照〕

ただ，この分類はあくまでも平面形を主にした分類なので，側面からみた，舷の反（ソ）り（極端な場合はゴンドラのようなもの）を分類にとり入れることも必要なのではないかと考えました。しかし，丸木舟は腐朽しやすく，多少とも破損しているのが普通で，最もこわれやすいのが舷の上端だから，側面観での形式分類は実際には困難だったのです―清水氏が実査した91隻

図６　丸木舟の型式分類〔清水　1958より〕
１鰹節型　２割竹型　３折衷型　４箱型

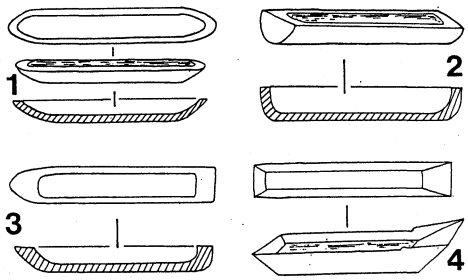
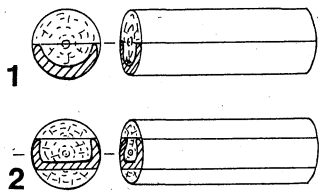


図７　二種の木取り法（模式図）〔清水　1968より〕



のうち，舷側の上縁が確認できたのは約１割だったそうです。

ところで，もう一つ基本的な観点は船体の横断面の形状で，大別して半円形と角形の２種があるのですが，植物学の亘理俊次氏のご教示もあって，注意ぶかく観察してみると，鰹節型では半円形，折衷型のうちの特徴的な一形式に属するものでは角形であることがわかったそうです。そして，この断面形での両者の差異は，実は全く異る製作技術によることがはっきりした，というのです。〔図７参照〕

横断面が半円形の場合，原材は中心から真二つに切り割られ，切断面の平坦な面を上にしてえぐられます。そこで原木のカーブはそのまま舟の外底となり，両方の外側もそれにつづいて，ゆるやかなカーブを描きます。

ですから両舷の上端の四隅が，その舟の最大幅となりますが，舷の上端を内側にむけて削ったときは，舷端からやや下ったところに最大幅が現われます。昔から“木を析（サ）く”というように，木を縦に割ることは可能で，『万葉集』にもこの言葉はよく使われていますが，石器時代にも同じ技術があったのです。

次に横断面が角形の場合は，技術がやや複雑で，原木は図７のように，上下の両面を並行に切り落され，そのうち，いずれかの平坦面が，大体そのまま外底とされ，平らな底が得られます。反対側は刳舟の名のとうり，船体をつくるためにえぐられますが，原木の最大幅は中央の部分にありますから，この舟の最大幅は舷の上端ではなく，舷側の中央付近になります。そして舷は上へ向うにしたがって内側へカーブをえがき，舷の上端では舟の幅を著しくせばめます。そこで，その内側を垂直に切ると弦側があまりに厚くなり，船内が狭くなるためか，内側のえぐりも舷のカーブに合わせて内彎するように，末ひろがりに削られることになります。そこで完成されたこの種の舟を上から見おろした平面図をえがくと，舷の上端の線のそとに，舷の外側の最も幅の広い部分をつなぐ線が現われることになり，実測図を作製するのに，とても苦労したことが多かったのです。

なお，半円形の場合には，原木のシンは真二つにされた上，えぐりとられてしまうけれども，角形の場合では，中央部にシンが残されていて，船体の主要部ではえぐりとられても，前後端にはそのまま残存することになります。船の前後端を熟視すれば，すぐにこれかわかりますが，重要なことは，この方法をとるためには，単に木を析くという技術だけでは困難で，原木の表裏からカマボコ形の部分を水平に切りとらねばなりませんから，おそらく鉄の工具を使ったものと考えられます。

清水氏の体験でも伴出する遺物を検討して，その推定が正しかったとわかったことがあるそうです。いずれにしろ，この点も丸木舟の年代決定の重要ポイントであったのです。

以上のように，これらはたいへん興味深く示唆に富んだ見解だと思います[9]。

Ⅲ　九十九里平野（八日市場市とその周辺）の低地・低湿地遺跡

１　九十九里平野での丸木舟発掘の進展

「千葉県内独木舟出土地一覧」〔千葉県文化財センター　1991，149～150〕によると，県内の丸木舟出土事例数は95件です。このうち八日市場市内が31件で全体の33%，周辺の光町・野栄町・横芝町・芝山町・多古町・干潟町を含めると72件で76%になり，この九十九里平野の北部に県内の丸木舟出土地が，いかに集中しているかがわかります。〔図８，なお丸木舟は，出土後に変形したり，腐朽がすすんでしまうことが多いので発掘を差控えている事例もいくつかあるようです。〕これは，古代のこの地域で丸木舟が盛んに使われていたという事実を示しているわけですが，それと共に，地元の有識者で丸木舟研究をリードされた桜井茂隆氏らの御盡力に負うところも大きかったのです。桜井氏が慶大の

松本・清水の両教授そして鈴木公雄氏などと連携して発掘調査を進展させたことが，“丸木舟の八日市場”につながったのです。それをいわば象徴的に表しているのが，市立公民館（図書館を兼ねる）の庭の一隅に設けられた，大きな水槽に沈めて展示されている丸木舟ではないでしょうか。これは誰でも自由に見れるし，写真も撮れます。〔写真16，17。なお，水槽で保管するのは変形・腐朽止めのひとつの方法でもあるようです。〕なお，『朝日新聞』2004年（平成16）12月４日・千葉地方版によると，八日市場市では前述の市立図書館敷地内の水槽で保存してある３隻の丸木舟のうちの１隻（カヤ材で長さ約4.5m）を，地域のいにしえを物語る貴重な資料として永く保存・展示することにし，02年度から３ヶ年計画（事業費約900万円）をすすめてきましたが，12月の補正予算案で保存・展示ケースの製作費224万円を計上しました。

展示場所は市民ふれあいセンターで，保存処置は木材本来の色調と質感を損わず保存性も優れているという「糖アルコール保存方法」が採用された，ということです。

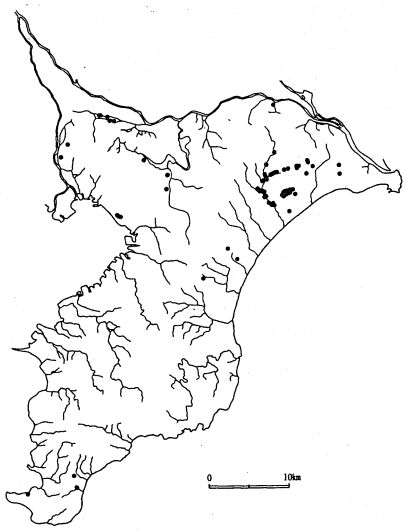
ところで桜井氏が『八日市場市史』で，「丸木舟の発掘」を執筆されていますので，その概要を摘記してみます。〔桜井　1982，77～85〕

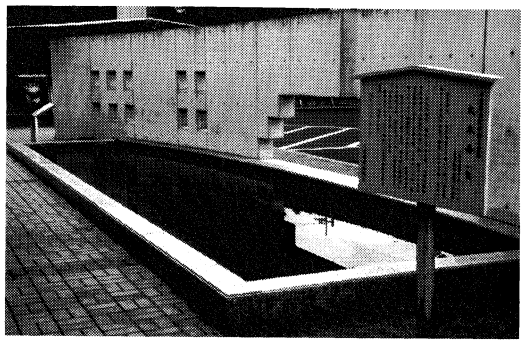
市内の丸木舟出土地は大別すると，八日市場下沼，椿湖（ツバキウミ）の周辺，栗山川流域の３地域に限られています。

(1)　八日市場下沼

ここはＪＲ総武本線八日市場駅と千葉寄り一つ手前の飯倉駅との間，線路の南側に連なる東西2.2km・南北200mのごく狭い区域です。昔はサンズイ沼・七間堀・下沼などという沼がいくつも続いていたので，この辺りを今でも下沼と言うようです。1934年（昭和９）の大利根用水排水工事でだいぶ様子が変わり，整然とした水田が広がっていますが，ここから15隻以上の丸木舟が発見されているのです。その最初の舟は，1917年（大正６）の旱魃で沼が涸れあがったときに，地元民が見つけ，しばらくは子供ら

図８　千葉県内独木舟出土地
〔千葉県文化財センター　1991より〕





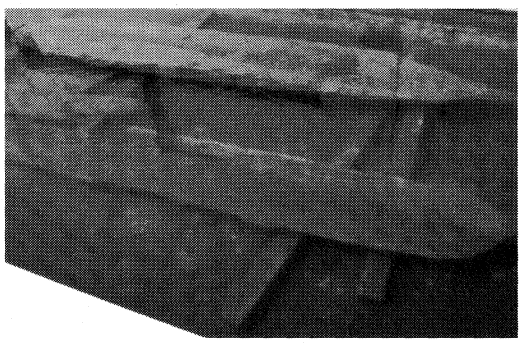


写真16・17　八日市場市立公民館の水槽に沈めて公開してある丸木舟

がそれで遊んでいたそうです。この舟が後に，早大の西村真次教授によって，先述の論文〔西村（真）1934〕でとりあげられました。そして，

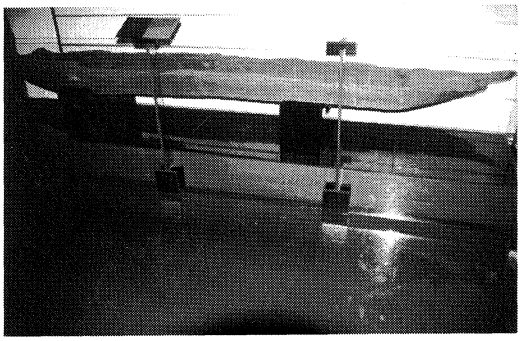


写真18　慶応大学文学部考古学研究室蔵の八日市場市米倉大境出土の丸木舟（国立歴史民俗博物館展示）

これが縄文時代丸木舟研究の発端ともなったわけですが，その記念すべき“残し沼の丸木舟”がこの舟だったのです。

戦後の1949（昭和24）の旱魃でも同様に，地元の人々が相次いで丸木舟を５隻，そして櫂も発掘しました。そして1955年（昭和30）に発掘された舟は，舷側と舟底が厚く，しかも均一ではなくて，刳り方も素朴であり，市内及び周辺から出土した丸木舟のうちでは最も古い様式を備えているので，松本教授はこれを縄文時代後期のものと推定されたのです（舟の大きさは長さ4.35m，幅43cm）。この舟は県指定文化財となり，前述の公民館に水中保存されています。また，佐倉市の国立歴史民俗博物館に展示してある丸木舟も，この地域から出土したものです。〔写真18〕

1955年にはこの他にもう１隻，続いて1959年（昭和34）にも２隻，どれも地元民の手で発掘されています。そして1961年（昭和36）には，慶大の松本・清水教授そして当時は大学院生だった近森正・鈴木公雄さんたちによって，後述の椿湖地区と共に，この地区でも発掘が行われております。

さらに1962年（昭和37）と1965年（昭和40）にも…というように，昭和30年代は丸木舟の発掘調査が急速に進展した時期だったわけです。舟の形は総体的にみて舟体胴部が厚手で鰹節形であり，用材はすべてカヤです。

(2)　椿湖の周辺

ＪＲ総武本線と平行して国道126号が通っていますが，それを八日市場駅前から銚子方向の東へ約1.5kmゆくと，1994年（平成６）の市制40周年記念にオープンした総合リクリェーション施設の八日市場ドームがあり，市役所もその隣にあります。この辺りまでが市の中心部で，そこからＪＲの線路沿いに東北へ約2.5kmの旭市までが，椿海（チンカイ）（春海（ハルミ））と呼ばれる区域になります。

椿湖という潟湖（ラグーン）は，かっては北へ約1.5kmの飯塚あたりまで延びていて，この旧椿湖も含め，椿湖一帯は，いまでは広々とした水田になっています。飯塚には，市内の縄文遺跡の中でもとりわけ注目されている多古田泥炭層遺跡があります。

ここからは丸木舟としては，舟首右舷の断片１個が出ただけなのですが，櫂が20本ほど出土しています。これらはどれも完形ではなくて柄頭部や水かき部なのですが，それらの文様に縄文晩期初頭の安行式土器の文様との関連が見られます。

なお，この多古田泥炭層遺跡を発掘調査した鈴木公雄さんは，縄文晩期初頭の安行式土器が落合遺跡付近でも若干出土していることを付言しております。〔鈴木（公）1982，37～41〕

それから，この椿湖地区出土の丸木舟は，先の破片の他に，やはり破片が４個，計５個がありますが，それらの用材はカヤではありません。

(3)　栗山川流域

栗山川とその支流の高谷川・借当川の流域では，八日市場市内よりも，周辺の多古町・芝山町・横芝町・光町などでの丸木舟の出土例が多いようです。耕地整理と河川工事のために，1955年（昭和30）ごろから数年間に発見が確認されたものが14隻で，これに戦前の２隻を加えると16隻ですが，内訳は栗山川から10隻，高谷川から２隻，借当川から４隻です。そのうち市内から出たのは２隻だけです―これも前述の公民館の水槽に沈めて展示してあります。

これらの用材は大部分がカヤですが，舟の形は様々で，典型的な鰹節型からゴンドラ型ともいえそうなもの，あるいは魚雷型といえるのもあります。年代も縄文後期と推定されるものから，鉄クギを使用したものまであります。

なお，山岸良二氏が『千葉県の歴史』資料調査研究の一助として「県内出土丸木舟」資料確認調査に参加した体験から，九十九里浜北東部の縄文丸木舟について，最近まとめられた論文で，次のように極めて興味ぶかく示唆に富む所見を述べていますので，それを紹介しておきます。〔山岸　2004，68～70〕

旧椿海湖岸地域〔前述の(2)の地域〕の現標高５ｍライン上で検出された，全長６ｍをこえる大型の「鰹節型」の丸木舟は，「外海航海用」として舟底を薄くして，スピードも出る工夫がなされ，他方，全長４ｍ前後の小型の舟は「鰹節型」と「箱型」で，八日市場市内でも横須賀地区や大境地区〔前述の(1)の地域〕及び栗山川流域〔前述の(3)の地域〕に集中しており，これらは日常的な「内湾・河川航行用」として，踏ん張りの効く横梁部なども設けたカヤ材などを使用して製作されたと考えられる。〔写真19参照〕今後は，各タイプの舟先端部の形状や，湖岸や海浜に対しての保留状態が復元できる出土状況なども，さらに詳しく分析することで，この問題の研究をより深化させていきたい。〔なおこの論文には，この地域で出土した丸木舟70隻の一覧表が載っており，遺跡名・所在地・全長・最大幅・材質・型式・時期のデータが記されています。〕

写真19　丸木舟の横梁
―八日市場市米倉大境出土の丸木舟
（千葉市立加曾利貝塚博物館展示，レプリカ）

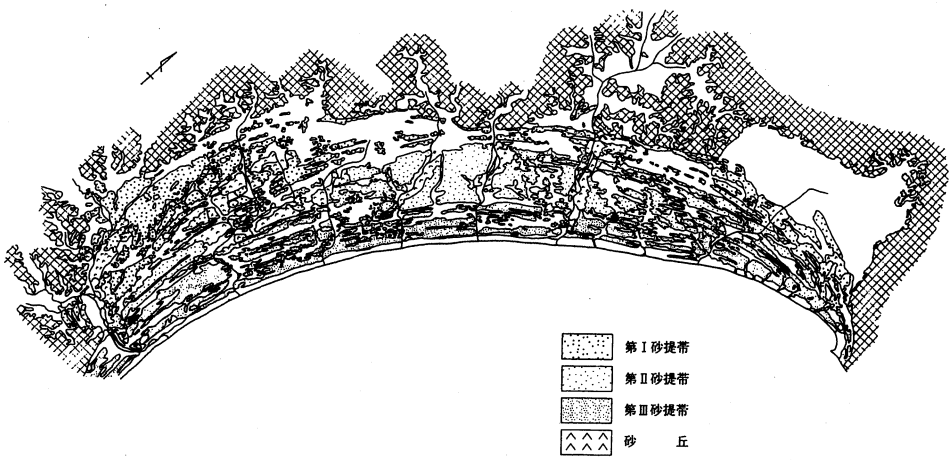
2　遺跡・遺物と丸子舟の年代比定
―台地・低地・低湿地の遺跡と
ムラ・キャンプ地・丸木舟

西山太郎氏によると，九十九里地域は標高数ｍの平野部と標高30数ｍの台地部からなっていますが，台地部には旧石器時代から中世の城跡など数多くの遺跡があるのに，平野部での遺跡は1950年代後半（昭和31～35）には10数ヶ所しか知られていませんでした。それが1985年（昭和60）ごろには約600ヶ所になり，1995年（平成７）ごろには1,100ヶ所を超すまでになったそうです（内訳は縄文141，弥生44，古墳198，奈良・平安597，中近世127ヶ所）。〔西山　2003，１〕

九十九里平野は降起海岸で，縄文時代以降の海退現象と複雑に関連しながら，砂堤と低湿地が交互に繰返される地形が，下総台地から現在の海岸まで，約10kmにわたって10列以上も続くようになったのです。そして例えば，前節で触れた椿湖（椿海）地帯の西端の干潟下層部（海成完新世の最上部）は，花粉分析による年代が約6,000年前で，その頃に椿海東部にバリアの一部が形成され，椿海が閉塞されたのは約5,500年前，そしてそれ以後に，北部では砂堤の前進が始まった，と推定されています。〔千葉県文化財センター　1991〕

ところで森脇広氏は，清水潤三氏らの先駆的研究〔清水　1954〕をふまえて，砂堤群を３時期に区分し，第Ⅰ砂堤群はおそくとも縄文中期

図９　九十九里平野の地形〔森脇　1979より〕



に，第Ⅱ砂堤群の台地側の一部は縄文後期に形成され，第Ⅲ砂堤群は古墳時代に陸化されはじめた，としております〔森脇　1979，図９〕。そして西山太郎氏は，こうした見方を活用して，九十九里地域の低地遺跡をその成因から二つに大別し，それぞれの特徴を，次のように捉える視点を強調しています。

一つは現在，宅地や畑地となっている所で，砂堤・砂州・台地裾部の微高地・河岸段丘などです。これらには，その環境によって「ムラ（集落）」が形成された場合と，そこまでに至らなかった「キャンプ」的性格のものがあるのですが，これらは一括して『低地遺跡』と呼ぶことができる，としています。

なおムラの遺構が検出されているものに八日市場市平木遺跡（ＪＲ八日市場駅の東2.5km）や光町柴崎遺跡（ＪＲ飯倉駅の西南２km）などがあり，キャンプ地の場合は茂原市小林西ノ原遺跡や旭市坊ノ前遺跡などがあって，土器などの散布は認められても遺構が検出できないこともあるそうです。

もうひとつは，主に水田や河川周辺の湿地や砂堤間低湿地で，ここは泥炭層も発達しており，生活の痕跡がなくて，丸木舟などの木製品や土器などの遺物が出土します。例えば八日市場市宮田下泥炭遺跡（前節の借当川流域）や横芝町高谷川遺跡Ｂ地点（前節の高谷川流域）などがこれに該当します。これらは，先の低地遺跡に対して，『低湿地遺跡』と呼ぶことができます。

西山氏はこれらの低湿地遺跡から発見される丸木舟が，現在までに116隻を数えるに至っているとし，この丸木舟の使途について次のように述べています。「縄文人は砂堤群の外側の海岸に出かけて貝類を採るために，また沼地などに乗り出してヒシの実などの食料を得るために，台地上の拠点としての集落と低地を行き来するための交通手段として，丸木舟を利用していたと考えられる。」〔西山　2003，１～３〕

西山氏はこの論文で多くの事柄に言及しているのですが，このこととの関連で，さらに次のように述べていますので，それを紹介しておきます。

まず西山氏は，小宮孟氏が，縄文中・後期の土器が出土する，栗山川流域の台地上にある横芝町中台貝塚の自然遺物を分析して，当時の状況を次のように推察していることに注目しています。即ち小宮氏は，この貝塚が形成された頃，栗山川低地一帯には，汽水種もしくは汽水域に浸入する魚類，そして鹹度の低い汽水域や内湾の砂底もしくは泥底に生息する貝類に適した環境があって，魚類は栗山川流域で獲り，貝類は砂堤群の外側まで出かけて得ていたのであろ

う，というのです。〔千葉文化財センター 1987〕

そこで西山氏は，これをふまえ，先ほどの自分の考えを，次のようにすすめるのです。

即ち，この時期には砂堤上に低地遺跡が形成されており，そしてそれと関わると考えられる丸木舟が低湿地遺跡から数多く発見されていることからすると，おそらく砂堤群の外側まで出かけて貝類をとるために，丸木舟を利用したとみることができるでしょう。丸木舟は台地上の本拠地としてのムラと，低地の一時的・季節的なキャンプ地を行き来するために使用したと考えられ，また湖沼に繁茂したヒシの実などをとる際にも使用したのではないでしょうか，というのです。〔西山　2003，13〕

これは興味ふかく示唆に富む視点だと思いますが，先にⅠ章2節の終りのところでも触れたように，武田宗久氏の千葉市落合遺跡についての見方と照合してみると，どういうことになるのでしょうか。

Ⅳ　館山市・海蝕洞穴の丸木舟

1　大寺山洞穴遺跡―舟葬と他界観

「日本の海食洞穴および海岸洞穴分布一覧」〔館山市教育委員会　1997，31～34〕によると，こうした洞穴は全国で270ありますが，房総半島南部や三浦半島には集中的にみられ，それぞれ23，24ヶ所で，館山市内だけでも9ヶ所あります。この章では館山市内の2ヶ所の海蝕洞穴をとりあげ，そこの丸木舟とこれまでの発掘調査の成果を検討してみることにします。

館山港に面した「沼」という地区に[10]，大寺山洞穴遺跡があります。ここは館山城のある城山公園の西側で，館山小学校から1kmほどのところに総持院という寺院があって，その裏山の裾，標高30mに位置し，3つの洞穴が西向きに並んでいます。第1洞は開口幅5.5m×高さ4m×奥行29mの規模で，ここから木棺として用いられた丸木舟が発見され，これが，日本では最初の舟葬の事例として知られるようになったのです。〔写真21〕

本格的な調査は千葉大学考古学研究室によって（調査団長・麻生俊教授，主任・岡本東三教授）1992年（平成4）の測量調査から着手され，以後1997年（平成9）まで6次にわたり発掘調査が実施されました。その結果，この第1洞から舟棺が計12基，3体の埋葬人骨，鉄製短甲など，一般の古墳に劣らない副葬品や土師器が出土したので，1995年（平成7）の第3次調査のとき，記者発表が行われ，各新聞紙上で報道されたわけです。

第2洞は崩れてしまいましたが，第3洞からは縄文後期の漁撈活動の実態を示す多くの資料として，貝類・魚骨・鹿角製の釣針・銛・土製の錘などの漁具，また珍らしい貝製や亀甲の装身具なども出土し，そして人骨も7体検出され

写真21　大寺山洞穴墓（舟葬）遺跡（館山市指定史跡）

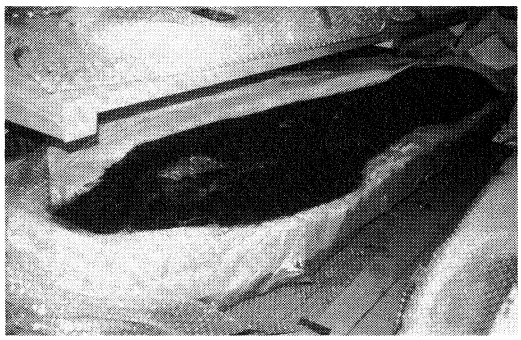


写真22　舟葬に用いられた丸木舟―大寺山第1洞穴出土（館山市立博物館蔵）

ました。これらは，正に安房の海人集団の原点を物語るものとされています。〔館山市教育委員会　1997〕

なお，舟棺（用材はスギ）の一部は，城山公園の館山市立博物館に収蔵保管されています。〔写真22〕

以上の発掘の成果から言えるのは，大寺山の3つの洞穴は，縄文時代後期には居住の場であったのですが，そのうち第1洞穴がその後の古墳時代になると，葬送の場として再利用されている，ということです。

ところで，本遺跡の発掘調査に団員として参加してはおりませんが，調査会委員であった国立歴史民俗博物館副館長（いまは奈良大学教授）の白石太一郎氏は「舟葬」について次のように述べています。

「…日本で確実に舟葬といえるものはこの大寺山洞穴遺跡などで，古墳時代の丸木舟を棺とした埋葬が確認されている程度である。それには鉄製短甲など一般の古墳に劣らない副葬品があり，この地域の族長を含む海人の埋葬とされている」とし，さらに次のような解説をしております。

「かって後藤守一は舟形石棺や舟形木棺などを舟葬と関連させて解釈したが（「西都原発掘の埴輪舟」『考古学雑誌』25―8・9，1935」，これら舟葬説については，小林行雄らの批判が早くからあった（「舟葬説批判」，『古墳文化論考』1976）。また，これらは棺底や蓋（フタ）の頂部が平坦なものであり，舟の形を意図したものかどうかも不明である。ただ九州の装飾古墳の壁画には，鳥がとまる舟あるいは舟のみを描いたもの（福岡珍敷塚（メズラシヅカ）・鳥船塚・竹原古墳など）があり，また大阪高井田7号横穴には舟を線刻しており，古墳時代に海上他界の思想が存在した可能性まで否定する必要はない。なお，大阪東奈良遺跡の弥生Ⅳ期とみられる墓に，丸木舟を棺に転用したものが2基発見されている。」〔白石2002，374〕

このように，舟葬の始まりを古墳時代の丸木舟の木棺とすることでは，いまのところ大方の見方は一致するにしても，どの段階のどのような形態までとするかについては，他界観の問題とも関わり，いろいろと見解の相違がある，ということのようです。これは私には難しい問題なので，ここでは立入らないことにいたします[11]。

2　鉈切洞穴遺跡―鉈切神社の縁起説話と社宝

前節の大寺山洞穴から，西へ約4kmの館山市浜田には船越鉈切神社があって，その境内に鉈切洞穴があります。鳥居から長く延びる参道を上ってゆくと，小さな丘の麓（標高25m）に，洞穴の口をふさぐように，拝殿が建っています。その脇から洞穴へ入ると，拝殿のすぐ後に小さな本殿があって〔写真23〕，その奥に大寺山第1洞穴よりさらに大きな幅約7m×高さ約4m×奥行き約40mの洞穴があるのです。発掘調査は1956年（昭和31）に行われました―調査委員長・千葉県教育委員会の平野元三郎氏，考古学班長・早稲田大学の滝口宏教授。そして縄文後期の土器，動物の骨や鹿角製の釣針，貝の腕輪など多くの遺物が出土し，ここにも漁撈の海人たちが住んでいたことがわかるのですが，丸木舟については以下のように，大寺山とはだいぶ事情が違っています。

鉈切神社の社宝としての丸木舟のことは，

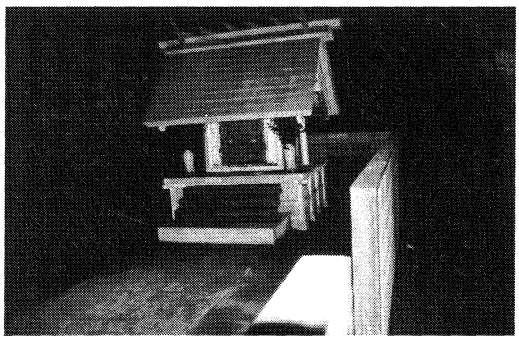


写真23　鉈切神社本殿―館山市船越・鉈切洞穴入口

1908年（明治41）の『安房志』や1926年（大正15）の『安房郡誌』に載っていますが，それらは水戸光圀が『大日本史』編さんのために派遣した使者・石井弥五兵衛に差出された文書にもとづくものです。その文書は元禄８年（1695）に鉈切大明神（船越大明神）の別当と塩見・見物・浜田の村々の名主や年寄たちが連名で差出したもので，この神社の創建にまつわる縁起説話と丸木舟の由来が記されています。

それによると，神亀元年（724）６月15日に海中をかきわけて亀に乗って現われた海神が，ここの海辺を荒らし廻っていた大蛇を鉈で切殺して住民を助けて下さったので，この海神を鉈切大明神として祀ることになったというのです。そのとき鉈で切りつけた所に「鉈切岩」という岩もございますが，お訊ねの舟は，45年前まで20隻ありましたのに，腐ってしまい，いまは２隻だけで，そのうち１隻も破損しております…という内容です。〔並木　1958，199～201〕

この神亀元年という神社創建年代は，もちろん全く典拠がなく，また縁起説話の内容についても，神社の氏子会の代表が私に教えて下さった説話では，場所が神社の裏手にある紫池になっていて，昔この浜田の里の長者が一人娘を池の怪物，大蛇への人身御供に差出さねばならなくなったのを，鉈切神が救って下さったというように変っています。そして神社の参道の脇には，「鉈磨き岩」があり，境内には「鉈洗い井戸」まであるのです。

それから問題の丸木舟ですが，元禄８年の時点で２隻になってしまったのですが，現在は１隻だけで，当時，破損していた１隻がいつ頃なくなったのかはわかりません。残っている１隻は拝殿前の神庫に社宝として保管されていますが，用材はクスノキで，長さは2.69m・幅70cmと極めて小形で，２人乗るのは無理ですし，風浪の少ない水面でしか使用できない，とされています。この舟のことは，Ⅱ章１節で触れた早稲田大学の西村真次教授が1916年（大正５）に

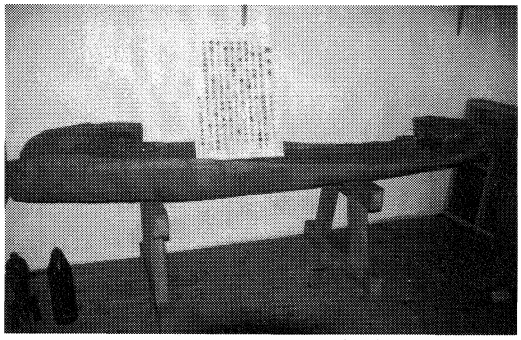


写真24　鉈切神社・社宝の丸木舟

とりあげていますが〔西村　1916〕，田原久氏は，それよりも，やはりⅡ章１節で触れた慶応大学の松本信広教授による，この舟に関する所見に注目し，次のように紹介しています。〔田原1958，202～203，写真24〕

「…その形状は，西村氏によれば鰹節型とされているが，かなり両端が方角となり，いわゆる割竹型に近く，ことに注意されるのは，両端の船底に２つづつの貫徹しないくぼみ穴が穿たれている。もしこの穴が最初から存したとすれば，舟としての用途以外，たとえば下部に棒杭の如きものをはめこみ，不動のものにして横臼の如く使用した場合も想定なし得るのである。」〔松本　1952，72～73〕

田原氏は，この松本教授の所見について，要約すると次のように付言しています。

松本教授が２つづつの貫徹しないくぼみ穴に棒杭のようなものをはめこみ，動かぬようにして横臼のように使用したと想定できる，とするのは一概に否定できないが，船底内面の磨滅部分は少なく，古色蒼然として人為的な磨滅をそれほど受けていない，と推定される部分が多いこと，またクス材を食物調整用に供することの可否などを考慮すれば疑問も残る。他方，田舟のように刳り箱を馬のカイバオケや水入れなどに使用している例は現在でもかなりあるから，臼以外の容器としての様々な使用法も考えられる。

また，全長３m未満の，舟として極めて小形

で１人しか乗れないが，秋田県船川のテングサ採取用の丸木舟とか，各地に小形の舟もあるから，どちらかといえば，やはり舟とみる方が妥当ではなかろうか。(中略) 以上のように，種々の疑問をはらむ点から，松本教授は，これを舟の資料としてやや特殊なものとして扱っておられるが，これが出土品ではなく伝世品であること，そして様々の伝説に彩られていることに，特に注目させるものがある。

これは，たいへん興味ふかく示唆に富む捉え方であると私は思います。

ところで，福寛美さんは，この鉈切洞穴の丸木舟のクスノキと『日本書記』でヒルコが乗せられた船とされる『天磐橡樟船』または『鳥磐橡樟船』のクスノキを関連づけ，樟（クスノキ）は大木になるので，船材に用いられることが多かったのですが，その独特の芳香で有機物の腐敗を抑制する効果を持つために，棺材にも適わしかった，としています。〔福　2003，277～278[12]〕

この点は，注７で触れたように，丸木舟の用材として，南関東の縄文式文化ではカヤ，同じ土師器の時代にはマツが多く，大阪付近ではクスノキが多く用いられていたことを考え合わせると，この鉈切のクスノキの丸木舟は，関西地方で作られたのかもしれないと思いますが，如何なものでしょうか。

というのは，鉈切神社の神庫には，１隻だけ残った丸木舟と並んで，鰐口１個が保管されており，それに陰刻された文字から，それが元禄10年（1697）に紀州栖原村の網元一同から，綿津見の神に奉納寄進さらたことがわかるからです。丸木舟の年代がいつ頃なのかは確定されていませんが，紀州あたりとの海上の行き来はかなり早くからあったと考えられますし，先の元禄８年の文書にある20隻もの丸木舟が，そうした関西との交流のひとつの結果なのかもしれない，という見方も可能なわけです。そして，これは並木健氏も言うように，石器時代の舟というよりは，鉈切神社信仰としての献上舟とみるのが妥当ではないでしょうか。〔並木　1958，201〕

なお，鉈切神社の祭神は「綿津見豊玉姫命」で，海神として尊崇の厚い綿津見神の姫命です。この姫命は海幸山幸神話のヒーローである弟の山幸彦（ヒコホホデミ）の妃となって，身ごもった御子を産屋で生み，真床覆衾に包んで波打ち際に置いたのを，妹の玉依姫が抱いて陸へ送りとどけ，やがてその御子（ウガヤフキアエズ）が姨の玉依姫と結婚して，４柱の男神が生まれる，というように皇統が継承してゆくわけです。

この海幸山幸神話で重要な役割を果たす豊玉姫を祭神とする神社では，長崎県の海神神社が最も名高いのですが，海を掌どり海上航行の安全を守護する神として，漁民に古くから崇められている点では，鉈切神社も全く同じです。前述のように，鉈切神社創建の年代は定かではありませんが，この綿津見姫命を祭神としているのは，それだけここが早くから海上航行上，極めて重要な港であったことを物語っているわけで，それが丸木舟の問題にも深く関っていると考えられるのです。

以上のように，ここの丸木舟は鉈切神社の「社宝」として，現在も氏子会が収蔵保管しており，年間の行事も数人の氏子代表が当番制で運営をとりしきっているのです。そして，これまでのような先行研究をふまえると，この鉈切の丸木舟は大寺山第１洞穴の舟とは，別の範疇で捉えた方がよいと私は考えております。

注

(1) 加茂と鳥浜の両遺跡から出土した丸木舟は，いずれも縄文前期ですが，C14（放射性炭素）年代測定によると，前者は約5,100年前〔渡辺 1963，235〕，後者は約5,500年前〔特別展図録『いま甦る丸木舟』若狭歴史民俗資料館〕で，いまのところ完形を保つ舟としては，後者が日本最古のものであろう，とされています。〔川崎 1991，375〕

(2) 沖積地や盆地などにある低い湿地は，多量の地下水が飽和状態にあるので，酸素が不足し，有機質遺物や植物遺体が十分に分解せずに残存します。そして東日本のこの種の縄文遺跡は，泥炭地遺跡とか泥炭層遺跡と呼ばれて居ます。〔鈴木（保）2002，595〕。他方その多くが，乾燥重量50％以上の植物遺体から構成された燃料となる泥炭ではなくて，夾雑物の多い泥炭質粘土層ないし黒色粘土層なので，「泥炭」という用語を使うのは不適切だとする見解もあります〔那須・市原1983〕。落合の場合はどうなのでしょうか。〔四柳2000〕に「良好な泥炭層が堆積していた」とする文言もみられますので，ここでは泥炭層の用語をそのままにしておきます。

(3) その後，グロート師の方は，1948年（昭和23年）9月から，研究員になった篠遠喜彦氏と千葉県市川市の姥山貝塚を4ヶ月かけて発掘調査し，それを1952年（昭27）に共著で出版すると，間もなくオランダに帰国することになり，研究所も廃止となります。なお，グロード師は帰国にあたり，神言会に所属する南山大学に研究所の資料を寄贈しており，それらはそこの人類学博物館に展示・保管してあるそうです〔吉田1991，4〕。

篠遠氏の方は，その後，ハワイ・ホノルルのビショップ博物館に移り，ポリネシア研究をリードする多大な業績をあげることになります。そのハワイ行きの前に，吉田格氏によりますと，前掲の図2にある，東大グランド内の鶴牧遺跡の調査を吉田氏と共に試みたそうですが，確たる成果はなかったようです。

それから，日本考古学研究所から丸木舟を移した武蔵野文化博物館ですが（武蔵野文化協会所属），後に武蔵野郷土館と呼ばれるようになり，さらに東京都江東区に江戸東京博物館が1993年（平成5年）に開設されると，小金井市の小金井公園にある，その分館の江戸東京たてもの園に所属がえとなり，現在に至っています。そして丸木舟はいまもそこに収蔵されています。〔写真2，参照〕

(4) 櫂は6本出土しています。この櫂の柄の彫刻については，次節でまた触れます。

(5) この後者の見解とみられるお一人が，先述の甲野勇氏で，渡辺直経氏も後年，これを実際にみて同意しています。〔渡辺　1963，234〕

(6) 日本民族学協会は創立20周年を記念して1957年（昭和32）夏に，日本民族文化の源流を探るために「東南アジア稲作民族文化綜合調査団」を組織し，インドシナ4ヶ国（ベトナム・カンボジア・ラオス・タイ）での現地調査をいたしましたが，慶応大からは松本教授が団長に選ばれ，清水・江坂の両氏が団員としてこれに参加しました。その成果は〔松本（編）1965〕として公刊されています。

(7) これらについて，本稿では紙数の制約から紹介できませんので，これに代るものとして〔清水　1962〕から，要点を摘記しておきます。

用材は亘理俊次氏の研究によると，時代と地域によってほぼ一定しており，南関東の縄文式

写真10　カヤの木（東京大学小石川植物園）〔注7参照〕

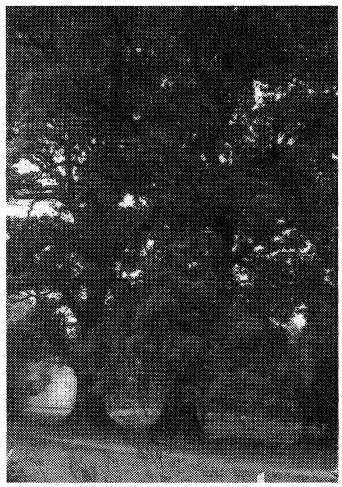


写真11　クスの木（東京大学小石川植物園）〔注7参照〕

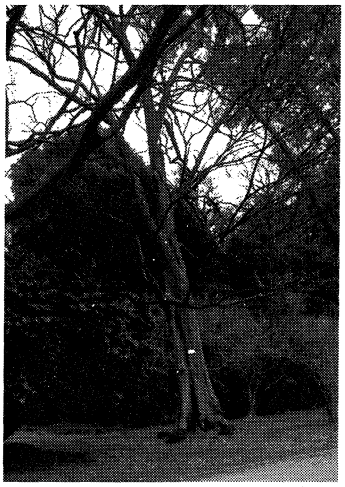
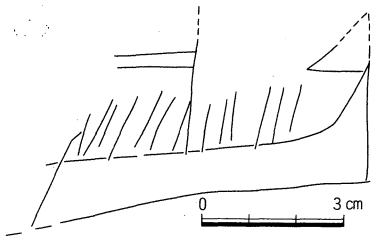


写真12　ムクの木（東京大学小石川植物園）
〔注７参照〕

写真13　「船の絵が描かれた土器」
〔市原市天神台遺跡出土，注７参照〕

図５　「船の絵」模式図〔写真　13参照〕



文化ではカヤ(常緑高木)，同じく土師器の時代にはマツ，大阪付近ではクスノキ（常緑高木）が多く用いられました。

なお，加茂の舟の用材ムクノ木（落葉高木）は，今日でも大木が千葉県に見出され，おそらく当時，これがこの付近で入手しやすいので，比較的水に重くても利用されたのであろう，と松本教授は述べております。〔松本　1952，89. 写真10.11.12〕

弥生式文化には登呂遺跡出土の断片と，他に模型らしきものが２例ありますが，登呂のは船首の形が現在の船舶に似ており，著しく進歩しています。土師器の時代と認められるものは，船首が尖り，船尾が方形で，断面が凵型になっています。大阪市内からは２本の木を用い，中央で接合した大型のものが数隻出土しています。

それから，これは〔清水　1962〕の引用ではありませんが，房総の注目すべき事例をここで紹介しておきます。それは市原市村上の天神台遺跡の弥生後期～古墳時代前期の集落の住居跡から出土した壷形土器の胴部中央に，焼成前に鋭利な工具によって線刻された船の絵が1991年（平成３年）に発見されたことです〔写真13・図５参照〕。

横８cm・高さ3.7cmの大きさで，船首を右に船尾を左に向け，船首先端の舳に三角の旗状の物を備え，船体の中央にマスト状の棒がたち，棒の先には二本の帯を風になびかせているようです。船体が上に伸びる線は櫂を表現していると思われ，櫂は13本で，この数からすると，この船の絵の描き手はやや大型の丸木舟に舷側板を付加した，外洋航海可能な準構造船的な船をモデルにしたのかもしれません。〔市原市文化センター　1992〕

この遺跡のある台地から東京湾と養老川河口を望むことができ，後に東海道の一部となる相模から東京湾を横断する海上ルートが弥生時代には確立され，西日本の文化が船に乗って房総に運びこまれていたと考えられます。〔市原市埋蔵文化財調査センター　1994〕

なお，山間の湖水，孤島，一部の海岸では最近まで丸木舟が実用に供されていました。〔清水　1962. からの引用はここまでです〕
そして，こうした現代での丸木舟使用の事例を沖縄から北海道まで，くまなく実地に調査してまとめたのが川崎晃稔氏の大著『日本丸木舟の研究』です〔川崎　1991〕。

川崎氏はその「序にかえて」で，丸木舟研究の問題の所在と研究史を概括していますが，10章「丸木舟の変遷」では，縄文時代（33例）・弥生時代（10例）・古墳時代（26例）・歴史時代

(16例)，総計85事例をリストアップし，舟の用材・大きさ・形態と特徴，及びそれらの発掘年次と引用した文献などが収録されております。その引用文献のほとんどが〔松本　1952〕か〔清水　1968〕で，このことからもお二人の業績のほどがよくわかります。なお，参考までに本書の内容を章別に示すと，次の通りです。1章・丸木舟の造船習俗，2章・南九州のはぎ船，3章・丸木舟の用材，4章・伐採と削刳工程，5章・山おろしの習俗（南西諸島），6章・丸木舟の製作儀礼，7章・丸木舟の分布と消長，8章・操船習俗と付属品，9章・丸木舟の製作用具（南西諸島），10章（前出），11章・丸木舟の形態と特徴，「まとめにかえて」，〈付録〉南九州の小型漁船に関する資料。

なお，現代での丸木舟使用の事例は，千葉県下ではみられないようです。

(8) 前の注7で紹介した川崎晃稔氏は，加茂の縄文前期の丸木舟について，「平面は割竹型だが側面はミカシの底が持ち上がり，鰹節型といえる。厚さも想像以上に薄く仕上げられており，同時に発掘された櫂の製作をみても，石器の使用技術が極めて高いことを示している。このことから，これ以前にもっと素朴な形，いわゆる本来の割竹型があったことを想定することができる。」と述べています。〔川崎　1991，407〕

(9) 清水教授の指導をうけた慶応大の近森正さんは，南西太平洋のソロモン諸島の南限に位置するレンネル島での，1964年（昭和39）から20数年に及ぶ現地調査にもとづき『サンゴ礁の民族考古学』を公刊されました。

この本のⅢ章「海の資源と自然の分類―漁撈活動」の末尾に，コラム「カヌー」を書いておられますが，日本の古代丸木舟を考える上でもたいへん興味深い事柄なので，ご紹介しておきます。

ここは地理的にはメラネシアに入るのですが，言語学的にはポリネシア・アウトライアーと呼ばれ，東へ移動したポリネシア人の一部が，再びこの近辺の島々に戻ってきた人たちで，レンネル島民もそのひとつです。ここはキリスト教が導入されたのが1938年（昭和13）で，たいへん遅かったこともあり，いまでもポリネシアの伝統文化がよく残っており，カヌーにもそれをみることができます。

レンネルのカヌーはポリネシアで一般的な腕木をもつアウトリガー・カヌーで〔写真14〕，数人乗りの大型と一人か二人乗りの小型があって，大きい方の長さは8mをこえるものがあり，小さいのは5.5m以下です。胴体の用材はガイメンガというアカテツ科の高木で，舷側がいくぶん内側へ反り，底部は丸くなっています。両側の舷側上に細い棒がとり付けられ，これが横梁に固定され，そこへ腕木が大型で3本，小型で2本設けられて，その先に舟と平行にフロートが設着される，という構造です〔写真15〕。航行には櫂と桿が用いられますが，テンガノ湖では帆走も行われ，その帆は昔はパンダナスの葉を編んだもの，いまは布地です。

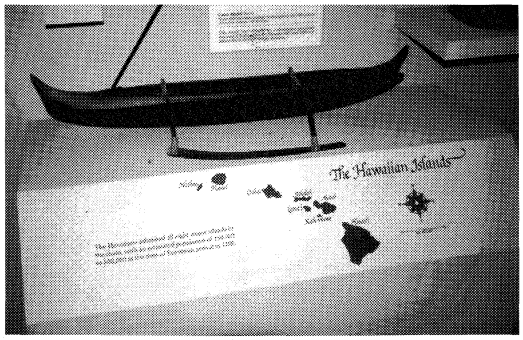


写真14　アウトリガー・カヌー（ハワイ・ビショップ博物館展示の標本）〔注9参照〕

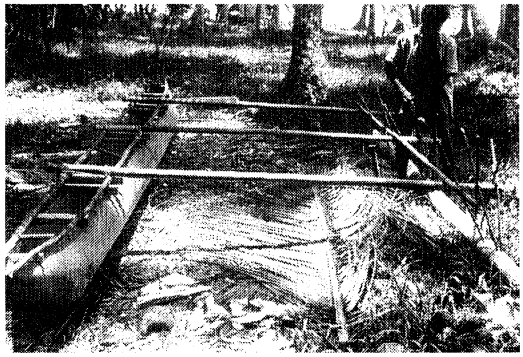


写真15　ソロモン諸島。レンネル島でのカヌーの建造〔注9参照〕

カヌーの建造は島民の大きな関心事のひとつで，特定の指揮者のもとに，集落の男の共同作業で，漁期の7・8月に先立って行われます。森林のガイメンガの樹は，土地所有者の合意により伐切されますが，10人位の成人男子が早朝から樹皮をはぎ，舟の長さに合わせて船体の外形を大まかに整えます。それから丸太をコロにして，村まで引きおろし，船体の成形を手斧と斧で整え，胴体は火を使いながら深く刳りぬい

てゆきます。製作には大型で50日，小型で28～30日かかりますが，カヌーの耐用年数は思ったより短く，西部レンネルのカヌーの約半数は2年以内に作られたものです。

サンゴ礁の岩礁で船体の傷みが早いのです。なお島民は，必要以上のカヌーを製作することはないそうですが，人口増加による焼畑耕地の拡大が，カヌー材の供給を困難にしており，長期的にみれば，カヌーの小型化の傾向がすすんでいるようです。〔近森　1988，119～120，なお写真15は，この119頁のものをコピーさせていただきました〕

⑽　この沼地区の，海岸から約1km内陸に入った標高20mの所に，千葉県教育委員会指定の天然記念物「沼サンゴ層」があります。〔写真20〕ここは造礁性サンゴ化石の分布の最北限になります（北緯35度）。6000年前，氷河期が終って温暖な時期となり，海面が今日より高くなった「縄文海進」の名残りで，当時のサンゴ礁の露頭が化石としてみられるのです。近森正さんによると，この「沼サンゴ層」のすぐ近くの稲原貝塚を発掘した江坂輝弥氏の資料の中に，サンゴのかけらがあったそうです。〔近森　2001，39〕なお，この標高20mの沼サンゴ層は単にその後の海水面低下だけでは説明できず，おそらく大きな地震のたびに大地が隆起して押し上げられたものと考えられるそうです〔近藤　1992，121〕

ところで，昨今の地球温暖化の影響で，高水温が原因で起きるサンゴ礁の”白化現象”が沖縄本島や八重山諸島で1998年（平成10）に大きな問題になりましたが，その後も回復しておらず，このほど日本サンゴ礁学会が環境省と協力してデータブック『日本のサンゴ礁』（英語版）をまとめました。これには日本の研究者約40人が執筆しています。

写真20　館山市の沼サンゴ層
（千葉県教育委員会指定・天然記念物）〔注10参照〕

2003年（平成15）には，小笠原諸島でも大規模な白化現象があり，慶良間諸島や奄美では白化だけでなく，オニヒトデも大発生しているそうです。一方，四国や九州では，海水温の上昇などで，サンゴの分布が拡大している可能性があり，生態系の乱れがみられると云います。そして，こうした現状は2004年（平成16）に沖縄県で開催される第10回・国際サンゴ礁シンポジュウム（6月28日～7月2日）で報告され，前述のデータブックの日本語版も近く作成されるということです。〔朝日新聞，6月28日，朝刊より〕また，このような状況は7月19日，朝7時半のＮＨＫ・ＴＶ「おはよう日本」の特集”沖縄のサンゴの森がいま危機に”でも放映されました。

⑾　注9で触れた，南西太平洋のポリネシア系のレンネル島では，死者の世界ポウンギにゆく道のひとつは，海上からです。死者の霊魂マウンギは島の東南岸にあるラバングの浜に集まり，そこで踊りをおどり，カヌーに乗って，彼等の創始祖先カイトゥがやって来た東の方向に向かって旅立ちます。

もうひとつは，天への道です。死霊マウンギは墓に葬られることにより，祖霊アタに転化されるのですか，その祖霊は，地上の人の世界と神のいる天の世界トゥアガンギの間を往き来して，人々の願いを神に伝え，健康や幸福，すべての富や財を子孫たちに送りとどける役割をもつ，とされています。

伊藤清司さんは「レンネル島の説話と他界観」という論稿で，こうした島民の他界観と古代日本の「とこよ」あるいは沖縄のニライカナイとを比較し，それらの共通性を指摘しています。〔伊藤　1978，近森　1988，242～243〕

⑿　田原久氏は，この鉈切の丸木舟について先に触れた『安房志』（明治41年，1908）の次の記事を紹介しています。〔田原　1958　204〕

「…此舟今，高性寺と伝える古刹に蔵す。就て之を覗るに，其製は独木を穿ちて舟を為す。虫蝕全体に亘り，古色靄然掬すべし。長7尺4寸強，幅最も広き所にて1尺7寸3分，全形は，てんま舟と云うものに似て舳艫形を異にす。亦得易からざるものとなす。内部は全く斧を以って刳たる痕跡を留む。質は橡樟の類ならん。按ずるに天磐橡船の名，神代巻に見へ，又，素戔雄尊の言にも，杉及橡樟　此両樹者可以為浮宝

とあり。浮宝は即ち舟也。然らば船材に樟を用ゆる由来久しきを知るに足れり。」

続いて，この舟の「左舷側面の大きな削り跡について，この神社の別当寺であった高性寺で，もとこの舟を保存していた当時，その住職が熱さまし，あるいは歯痛の薬だといって少量づつ削って頒布したもので，現にこれを煎じて呑んだ人がある。斬く明治時代になってこの弊をやめさせたという。」

この削った痕跡は，写真24のように，いまでもはっきりと見ることができます。

参照文献

石井　謙治　1957 『日本の船』創元社

石井　英雄　1988 「史学科の思い出」〔大野　1988〕

市原市文化センター　1992 『私たちの文化財』19

市原市埋蔵文化財調査センター　1994『埋文いちはら』4

伊藤　清司　1978 「レンネル島の説話と他界観」『慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室小報』No. 3

江坂　輝弥　1954 「海岸線の進展からみた新石器時代」『科学朝日』14―3

大賀　一郎　1951 「蓮の実の植物学的研究と検見川遺跡の古代蓮実発掘について」（6月9日，国松画廊での講演），「発芽力を有する古蓮実について」（9月8日，日本人類学会例会）

大野　瑞男（編集代表）1988 『東洋大学文学部史学科の五十年』

大林　太良　2001 『私の一宮巡詣記』 青土社

大和久震平　1988 「思い出」〔大野　1988〕

岡本　東三（編）2000 『安房の海食洞穴を掘る』千葉大学考古学研究室

川崎　晃稔　1991 『日本丸木舟の研究』法政大学出版局

近藤　精造（監修）1992 『千葉の自然をたずねて』・日曜の地学19　築地書館

グロート，G・篠遠喜彦　1952 『姥山貝塚』日本考古学研究所

桜井　茂隆　1982 「丸木舟の発掘」『八日市場市史』上巻　八日市場市史編さん委員会

清水　潤三　1952 「遺蹟の位置及び地形」，「遺蹟の発見」，「発掘の経過と遺蹟の状態」〔三田史学会　1952〕

〃　〃　1954 「九十九里沿岸に於ける低地遺跡の研究（予報）」『史学』27

〃　〃　1962 「独木舟」『日本考古学辞典（藤田亮策監修）東京堂出版』

〃　〃　1968 「古代の船―日本の丸木舟を中心に」須藤利一（代表）『ものと人間の文化史・船』法政大学出版局

〃　〃　1975 「古代の船」，大林太良編『日本古代文化の探究　船』社会思想社

白石太一郎　2000 『古墳の語る古代史』（岩波現代文庫）岩波書店

〃　〃　2002 「舟葬」『日本考古学事典』（編集代表　田中琢・佐原真）

鈴木　公雄　1982 「多古田泥炭層遺蹟」『八日市場市史』上巻　八日市場市史編さん委員会

鈴木　　保　2002 「低湿地遺跡」『日本考古学事典』（編集代表　田中琢・佐原真）

高野　忠興　1965 「ここを掘ればハスの実が出る」『学士会会報』688号

高橋　統一　2001 「年譜からみた民俗学と民族学の草創期」『東洋大学アジア・アフリカ文化研究所　研究年報』36号

武田　宗久　1953 「低湿遺跡」Ⅱ章2節(3)，『市制30周年記念・千葉市誌』千葉市誌編さん委員会

館山市教育委員会　1997 『館山市大寺山洞穴遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

田原　　久　1958 「船越鉈切神社の独木舟」『館山鉈切洞窟』（平野元三郎・金子浩昌編）千葉県教育委員会・館山市教育委員会・安房郷土研究会

近森　　正　1988 『サンゴ礁の民族考古学―レンネル島の文化と適応』雄山閣出版

〃　〃　2001 「講演録：サンゴ礁と人間」『三田評論』6

千葉県文化財センター　1987 『主要地方道成田松尾Ⅳ―中台遺跡』

〃　〃　1991 『多古町南借当遺跡』千葉県文化財センター調査報告第195集

千葉市立郷土博物館（編集・発行）1988 『大賀ハス』（監修・吉田公平）

中野　尊正　1948 「千葉県検見川独木舟遺跡地付近の地形」『地理調査所時報』3　千葉大学

中村　　毅　1988 「史学科の思い出―20年後半から30年前半のころ」〔大野　1988〕

中山　吉秀　1988「千葉県の河川と低地遺跡―特に河川出土の独木舟を中心として」『資料の広場No.19―特集　千葉県の河川』
那須　孝悌・市原　寿文　1983「〈低湿地遺跡〉および関連する用語の定義について」『考古学研究』30―2
並木　　健　1958「鉈切神社について」『館山鉈切洞窟』(平野元三郎・金子浩昌編) 千葉県教育委員会・館山市教育委員会・安房郷土研究会
西村朝日太郎　1978「西村真次・人類学的日本文化史」『日本民俗文化大系10　西田直次郎・西村真次』講談社
〃　〃　2003『海洋民族学論攷』岩田書院
西村　真次　1916「鉈切船越神社所蔵の刳舟」『人類学雑誌』31巻10号
〃　〃　1934「関東発掘刳舟の二型式」(東京人類会創立50年記念講演会記事)『人類学雑誌』49―6，231
〃　〃　1938「先史時代及び原史時代の水上運搬具」『人類学・先史学講座』6
西山太郎　2003「九十九里地域の低地遺跡再考」『財団法人・東総文化財センター設立10周年記念論文集』東総文化財センター
福　　寛美　2003『沖縄と本土の信仰に見られる他界観の重層性』DTP出版
松本　信広　1952「上代獨木舟の考察」〔三田史学会　1952〕
松本　信広(編)　1965『インドシナ研究―東南アジア稲作民族文化綜合調査報告(一)』有隣堂出版
三田史学会(著作兼発行者代表　松本信広)　1952『加茂遺蹟―千葉県加茂獨木舟出土遺蹟の研究』
森川　昌和　2002『鳥浜貝塚―縄文人のタイムカプセル』未来社
森脇　　広　1979「九十九里浜平野の地形発達史」『第四紀研究』18―1
山岸　良二　2004「九十九里浜旧椿海周辺の縄文丸木舟」，慶応義塾大学文学部民族学考古学研究室編『慶応義塾大学民族学考古学専攻設立25周年記念論集　時空をこえた対話―三田の考古学』六一書房
吉田　　格　1991「学史逍遥録：先史学者G．グロート師」『考古学論究』創刊号　立正大学考古学会
四柳　　隆　2000「落合遺跡」『千葉県の歴史』資料篇・考古Ⅰ(旧石器・縄文時代)
渡辺　直経　1963「日本先史時代に関するC14年代資料」『第四紀研究』2巻6号

あとがき：むすびに代えて

Ⅱ章2節の冒頭でも触れたように，わが国の丸木舟の研究史は早稲田大学の西村真次教授によって扉が開かれたのですが，御子息の西村朝日太郎氏も父の影響を早くからうけ，同じく早大教授となり，労作『海洋民族学論攷』を上梓されています〔西村(朝) 2003〕。その朝日太郎氏が父の生涯について解説した文章の中に，次の一節があります。

「…人類学的諸科学においては他の社会科学よりはるかにフィールド作業が重要であることは改めて述べるまでもない。真次はしたがって機会あるごとに発掘に調査に出かけていた。少年時代，筆者もよく真次に伴なわれて考古学的発掘に出かけたものである。巣鴨西ヶ原の貝塚でまだ東大の金ボタンの制服姿凛々しい八幡一郎氏に真次と共に会ったのは五十数年前のことであろうか。」〔西村(朝) 1978　272～73〕

これは，おそらく大正10年頃のことかと思いますが，大正14年(1925)には柳田国男先生の下で新進の岡正雄などにより，民俗学と民族学を包括した雑誌『民族』が発刊し，また岡や古野清人，小山栄三，須田昭義，八幡一郎，江上波夫などによるAPE(エープ)会が発足しています―この会名は，Anthropology(人類学)・Prehistory(先史考古学)・Ethnology(民族学)の頭文字をとり，APEが類人猿だから，いずれはヒトに進化発展するのだ，との寓意と気概をこめたということです。〔高橋　2001，18～19〕このように大正末から昭和初期はいわば学際的な雰囲気が若い研究者の間に高まっていた時期だったわけです

なお，先の西村朝日太郎氏の文章には，続いて次のような回想が記されています〔西村(朝) 同上〕。

「…古代船舶の研究に一生をかけていた真次は，独木船の発掘の情報が手に入るとさっそく調査に出かけていった。かつて香取神宮の裏手から刳舟の出た時には，冬の最中ではあったが，私を伴なって調査に出かけていった。伴出遺物がないというので，人夫を使い１週間も費してやっと非常に古い弥生式土器を発見した。小野川刳舟の年代決定に重要な手掛りが得られたというので，真次も非常に喜んだことを記憶している。」

これは参照文献の「西村（真）1934」に出てくる，佐原市小野川遺跡で昭和６年（1931）に実施された発掘調査のことで，50数年後に中山吉秀氏によってとりあげられています。〔中山1988〕

さてAPE会のところで江上波夫先生の名前が出ましたが，後年，日本民族と国家の形成についての大胆な仮説「騎馬民族征服王朝説」や東アジアから中央アジア・西アジアに至るスケールの大きなオリエント学でよく知られた，この東大教授にも若き日の興味ふかいエピソードがあります。

私は2003年（平成15年）10月22日のNHKラジオライブラリーの放送で，江上先生の「わが故郷，わが青春」という話を聴いたのですが，これは1997年（平成９）１月の再放送とのことでした―なお，江上先生は2002年（平成14年）11月11日に96歳で亡くなられました。

それによると，江上先生は大正後期，東京府立五中在学のとき肋膜炎・肺炎などで外房海岸に転地療養したのですが，そのとき海蝕洞穴を見学したのが刺激となり，帰京後に人類学会へ入会したのだそうです。

この外房の海蝕洞穴とは，岡本東三・千葉大教授によると，勝浦市の本寿寺・長兵衛岩陰・守谷などの洞穴群のことで，江上先生はとくに守谷洞穴を精力的に調査して，その成果を浦和高校（旧制）の文芸部の同人誌に投稿したのだそうです。そして，これが安房の海蝕洞穴研究の端緒となったのです。〔岡本（編）2000〕先史考古学や民族学・人類学への志向をもたらした，江上先生にとっての「わが故郷，わが青春」はまさに房州だったのです。

ところで「騎馬民族征服王朝説」というのは，北方系の騎馬民族が朝鮮半島を南下し，海を渡って九州からやがて近畿地方に入り５世紀の河内王朝を成立させるというもので，この仮説は敗戦後の虚脱感からまだ抜けきらない1948年（昭和23）５月に，岡正雄・八幡一郎・江上波夫・石田英一郎の４氏が３日間，朝から晩までぶっ通しで行ったシンポジウム「日本民族＝文化の源流と日本国家の形成」が，翌年の『民族学研究』13巻３号に特集として掲載され，その中で公けにされたのです。当時を回想して大塚初重・明治大学名誉教授は，「それまで皇国史観でねじ曲げられてきた古代史像に新鮮な光が当ったような感覚で話題にされた」と江上先生への追悼文に書き添えています。〔『朝日新聞』2002年11月18日夕刊〕

江上説には賛否交々，多くの反響があり今日まで，批判とそれへの反論がいろいろありました。いずれにしろ，白石太一郎氏も指摘するように〔白石　2000，157～164〕江上説は過去の学説ではなく，日本における初期騎馬文化受容の実態はいまなお解明されてはいないのです。

ところでこのような戦後の新らしい学問の再出発をめざして登場したものの中に，本稿のⅠ章とⅡ章でとりあげた千葉市の落合遺跡や安房郡豊田村（いまは丸山町）の加茂遺跡での丸木舟発掘調査があったわけです。その過程で慶応大学の松本信広先生や清水潤三教授によって丸木舟の諸形態と年代の解明が行われたのです。

そして，それがⅢ章で触れた昭和30年代（1955～65）の九十九里平野での丸木舟発掘調査の著しい進展に結びつき，さらにⅣ章でみたように，古墳時代以降の問題関心へとつながっていったのです。

他方，こうした状況を垣間見ながら，何とかして丸木舟を発掘して然るべき成果を得たいと努力を重ね，それが実ったのが「まえがき」で紹介した，福井県三方湖畔の鳥浜貝塚での1980年（昭和56）の丸木舟発見だったのです。このようにみてくると，戦後半世紀以上を経た，丸木舟研究の現状はどうなのか…ということになるのですが，―房総については，これまで各章節で若干は触れましたけれど―いま手許にあるわずかの情報から，他の地域について少し紹介し。本稿の締め括りにすることにします。

『文化財発掘出土情報　増刊号（通巻244）特集　発掘された日本列島2002年　新発見考古速報展』〔（株）ジャパン通信情報センター〕の縄文時代の項に，丸木舟に関連する二つの事例が載っています。

ひとつは，神奈川県小田原市の羽根尾遺跡群の貝塚で，1999年（平成11）に櫂７本が縄文前期の南関東の関山式と黒浜式土器や東海系の土器が含まれた泥炭層から見つかっています。当時は相模湾の入り江がこの辺りまで来ていたのと，湧き水があったことで低湿地になったために，木製品が腐らなかったわけです。ヤマトシジミを主体にした貝層や相模湾で漁をしたとみられるイルカ・サメ・カツオやシカ・イノシシなどの骨も見つかっており，発掘調査団長の戸田哲也・玉川文化財研究所長は，5,500年前の縄文人の食生活を知る上で貴重な発見だとしています。

もうひとつは，北海道石狩市の紅葉山49号遺跡で，ここから2000年（平成12）に縄文中期（3,800年前）の魚を捕獲する仕掛けの魞（エリ）がほぼ完全な形で見つかっています―これまで最古の魞の遺構とされていたのは，3,000年前（縄文後期）の岩手県盛岡市萪内（シダナイ）遺跡のものとされていたそうです。〔なお「エリ漁」は霞ヶ浦や琵琶湖でも古くから行われましたが，東京湾の千葉県側，木更津市周辺の海は遠浅の浜が広がる好漁場で，潮の干満を利用した「簀立て（スダテ）漁」では，このエリ漁をとり入れたとされ，昭和初期～40年代が最盛期でした。いまも同市金田海岸などに観光用として残っています。『朝日新聞』2004年８月７日・夕刊より〕

ところが，さらに翌年にこの紅葉山49号遺跡で，道内最古とみられる縄文中期（4,000年前）の丸木舟の舳先（ヘサキ）の一部が見つかり，また櫂も見つかりました―これまで道内では，擦文時代（約千年前）の千歳市のユカンボシＣ15遺跡出土の丸木舟が最古とされていました。

見つかった丸木舟の一部は舳先の先端の右側で最大長45cm・最大幅22cm・厚さが最大４cmで，東京都立大学の山田昌久・助教授は，「木の厚さ，表面のカーブ，やや荒く削った加工などから，丸木舟の一部であることは明らかで，想定される舟の大きさは，最低でも５～６m，幅70cmほどだったと思う」と話しています。また，櫂は長さが1.6m，水かき部の幅が７cmです。

以上で筆を擱くことにしますが，本稿をまとめるまでには，情報の入手や不明な事柄についての御教示などで，多くの方々のお世話になりましたので，最後にそのお名前を記し，あらためてお礼を申上げたいと思います。

なお，「まえがき」でおことわりしたように，考古学は私の専門ではありませんので，本稿には誤りもあることと思います。どうかお気づきの点を御教示いただければ幸です。

お世話になった方々は，次の通りです（敬称は略させていただきます）。

村田六郎太（千葉市立加曾利貝塚博物館・副館長）
山本　勇（千葉市教育委員会生涯学習部文化課・主幹）
四柳　隆（国立歴史民俗博物館・管理部展示課）
高田　博（千葉県立安房博物館・学芸課長）
岡田晃司（館山市立博物館）
実川　理（八日市場市教育委員会生涯学習

課）
浅川範之（江戸東京博物館分館・江戸東京たてもの園）
吉田　格（立正大学名誉教授）
坂詰秀一（立正大学教授，元学長）
美ノ谷新子（立正大学助教授）
窪　徳忠（東京大学名誉教授）
江坂輝弥（慶応義塾大学名誉教授）
近森　正（慶応義塾大学名誉教授）
市原寿文（静岡大学名誉教授）
谷口房男（東洋大学教授・アジア文化研究所長）
飯塚勝重（東洋大学アジア文化研究所）
竹内老子（東洋大学アジア文化研究所）

〔付記〕

2004年（平成16）10月30日（土）午後１時～２時半に東洋大学白山校舎１号館1408番教室で，アジア文化研究所と白山人類学研究会の共催により行われた公開研究例会において，本稿の概要を口述発表いたしましたが，今回はその後に入手した情報や若干の考察などを加筆補充してあります。